# THE Y.W.C.A. MONTHLY

# 女子青年界

## 拾月號

大正十年七月一日發行（毎月一回一日發行）

女子青年界第十八卷十月號

Y.W.C.A

目次



日本基督教女子青年會發行

# 婦人之友社の三大雜誌

## 「婦人之友」

毎月一回 一日發行

一冊金四十錢 郵税一錢五厘

主幹 羽仁もと子

## 「まなびの友」

毎月一回 一日發行

一冊金廿五錢 郵税一錢

主幹 羽仁もと子

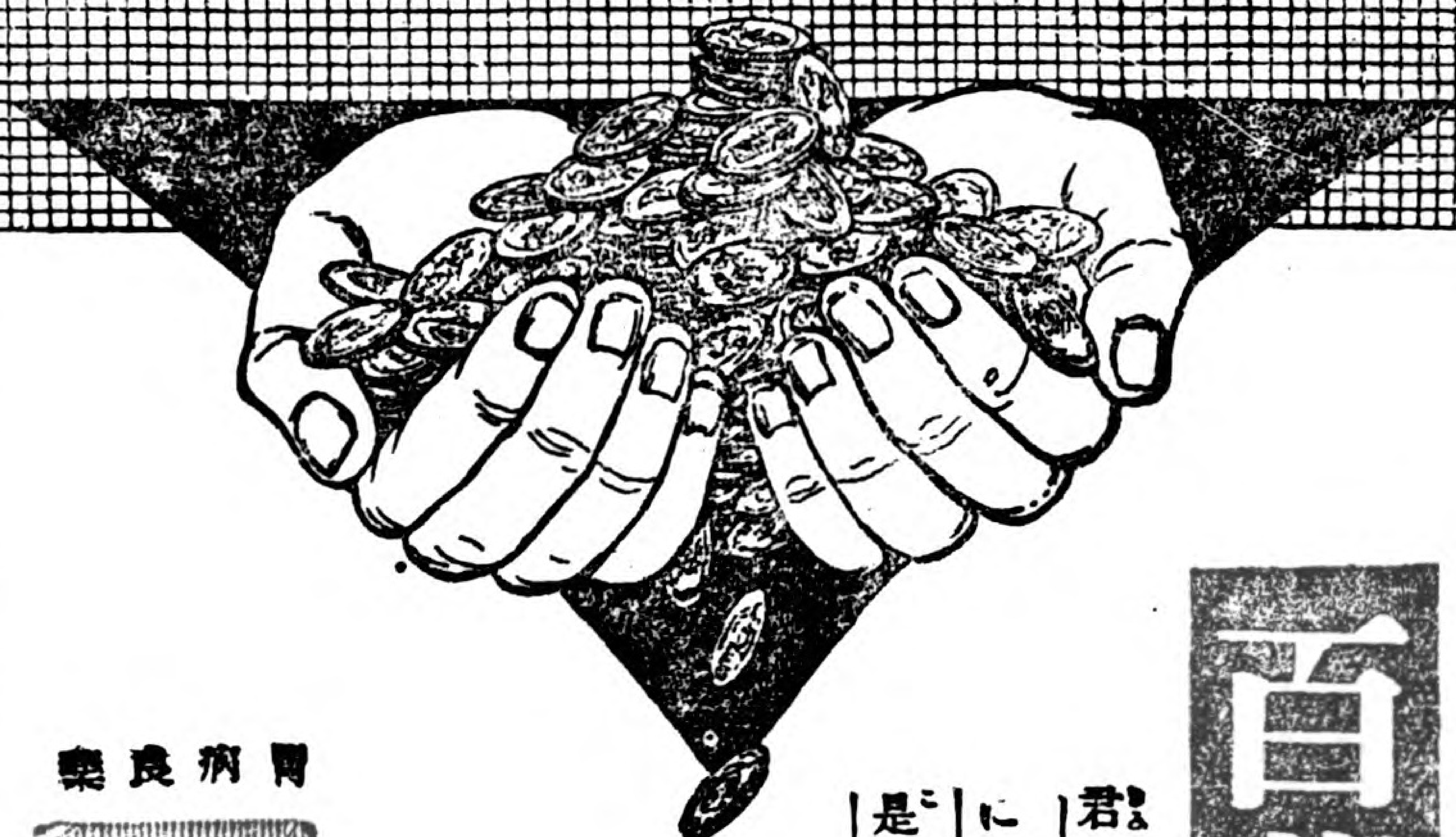
## 「子供之友」

毎月一回 一日發行

一冊金廿五錢 郵税五厘

主幹 羽仁もと子

東京雜司ヶ谷 婦人之友社 電話番町三六九八 振替東京一一六〇〇



# 百萬圓でも

君の強健な其の胃の腑を百萬圓出すから僕に賣つて呉れ給へ……と言はれた處で是ればかりは出來ない相談。けれども玆に良法あり、金廿錢を投じてホシ胃腸藥を求め常に服用試みられよ。如何なる胃腸の患も直に治つて百萬圓でも買へない強健な胃腸に忽ちなれる

▲定價 金五十錢一圓 試用金廿錢▼

胃病良藥

# ホシ胃腸藥

東京京橋南傳馬町 星製藥株式會社

女子青年界 第十八巻 第十號 大正十年十月一日發行

# 懺悔

河井道子

上海の熱心な信者で内山完造氏と申さるゝ人があります。この春商用で一寸御上京なされました時、私共は無理に時間を割愛して頂き、日支關係につき、御講話を願ひました。一般學者や政治家の説を新聞雜誌で讀み、或は講演で聞くのと全く趣きを異にした、生々とした實際に觸れた國際觀を私共に與へられ、どうしても信者の視方は、何事に於ても他と異る見地からであるといふことをしみ〴〵思はせられました。

同氏が今回實に面白い、有益な感想を御贈與下さいましたので、是非共之を讀者に紹介し、お互に學び度いと思ひます。其要點を云へば責任の轉嫁といふ事で、例へば喧嘩をしても兩方とも相手を惡い々々といひ自身の過ちを認めないこと、それから病があれば之を己が不養生不道徳に歸せずして氣候風土方角時節等に之の責を嫁し、又事業に失敗した場合、己が不注意不正直等を顧ずして相手が狡猾であつたから、或は運が惡かつたからといふ風に之をとり、遂ひに之が支那の國民性をなすといふ事であります。かゝることは强ち支那に限らず日本にも實に有り勝ちの事で、迷信御幣かつぎもこれより生じ不遜虚傲の態度も責任轉嫁か

ら起る事を反省しなければなりません。更に廣く之を考へれば人間一般の共通性とも之をいふことが出來ませう。歐洲大戰爭に於て聯合國は獨逸に其罪を歸し獨逸は聯合國に彼等困憊の原因を歸して居ります。日本は米國に、米國は日本に排日問題の原因を歸して、各々自國を君子國の如く申して居ります。日本が支那を嘲笑しますれば、彼、我を、罵倒し、何れが是か、何れが非か門外漢が迷つて居ります。

社會にしても資本家と勞働者の爭鬪はどちらも責任の轉嫁ではありませんか、學校のストライキに於て當局者と學生とがお互に其缺點及び罪を謝しあつた例が何處にありませう。一事業にたづさはる同僚に裏面の葛藤は何處から起りますか。互に己れは善し他は惡しと云ふ傲慢な精神から涌きたる苦き濁流であります。もとより一方正しくして、一方は不正なる場合軋轢の生ずることは確かであります。然しながら人間同志の關係に於て又人間に依つて組織された社會國家間に軋轢のあつた場合、一方が全々間違なく正しいと云ひ得る事はありますまい。例へばこゝに二人あつて甲は正しく乙は正しからざる場合。不和が生じます。甲が乙の惡をたゞ攻めるといふのであれば如何に彼が正しくあつても、忍耐のない、同情のない、好意のない攻め方を致しましたら、これは人情として缺けた點のあることをあらはして居るではありませんか。況して自分が惡い爲の不和の生じた場合其責任を他に歸する如きは、人間としての價値を失つた證據であります。この立場から見ますと、如何に懺悔といひますことは貴く、美しく、神々しいものでありませう。懺悔とは第一神の前になすべき事、第二、私共が損害を與へた其相手になすべき事であります。罪を謝し、悔ひ改めた生涯をなすことを申します。

近頃いろ〳〵の懺悔錄が愛讀さるゝは結構と存じます。然し神と、我等が害うた相手になすべき謝罪を、此二者にはせずして世間一般に己が罪を麗々と發表した小說や、感想が持囃されることは悲しむべきことで

あります。これは記者自身が懺悔の精神を失ひ虚名心を得んとするより他ありません。

且つて一毒婦が改心したとて彼女一身の過去を芝居に演じて、彼自身が見せたことがあります。ところが却つて是は、彼女に慢心を與へ見物人に惡事を皷吹したものとなりました。私共も罪愆を犯した場合、却つて自慢話、手柄話の如く誰々を困らせてやつたとか、虐めつけてやつたとかとて聲高々と話す如きことはありますまいか、是等は實に眞の悔ひ改めの精神の缺乏した結果であります。

昔より偉人ほど懺悔心が強く、己れの非を認むることが深遠なものでありました。「我は罪人の長なり」と聖ポーロが申しましたやうに聖人と云はれる人々は、皆己が罪を詫びると同時に他人の罪、世の罪を己れのものとして神に懺悔して居ります、かゝる意味に於て、キリストのゲッセマネの祈りを厳かに考へ、詩篇五十一篇の祈りを讀めば實に胸にひしひしとあたるところが多くあります。私共どうぞ罪を他に歸せずして、自分が惡かつたと詫びるにとゞまらず、他人の罪をも負ふ位まで己が身を低くしたいと存じます。どうぞ個人、社會、國家は神の前に謙り、責任の轉嫁をすることなく、常にポーロやダビデの懺悔を持つて向上をはかり度いと存じます。」

# 占ひと易の故郷

内山完造

易學とか占術とか觀想とかいふと、哲理が何とか　彼んとかと七六つかしい議論になる事勿論ですが、

元來無學の私には哲理も、哲學も解りつこはありません。只直接支那人に接して彼等の現狀から見た極めて貧弱な材料を土臺として、占ひの戸籍を調べてみました、其の到達點を御紹介申ます。

私は上海の店迄毎日車で、通つて居ります。車賃は初めには定めません。下りる時にやります。其の賃錢は規定、もしくは少し多い位にやります。大部分は默つて受け取つて歸りますが、中には安いとか足らんとかゴテ／＼云ふのもあります。默つて受け取つて歸る者は多く若い達者なよく走る者共であります。ゴテ／＼云ふて時には喧嘩腰で八ケ間敷いふ者は、多く老人かでなければ弱いよく走ることの出來ない者であります。どうしてこんなにわかれるのであらうと實は少々考へました。處が若い達者な者は稼ぎ高が多いが、弱いヨボ／＼連中は稼ぎが少ないといふ一つの理由もありますがそれよりも時にかういふこともあります。よく走る者には同じ道程を走つても自分の速力が早いために時間が少いばかりでなく、達者な丈けに疲れが少いので結局道程が割合に近く思へるに反して、ヨボ／＼連は同じ道程でも自分の速力の遲いために多くの時間を要する、そして弱いために疲れが多い、其結果遠かつたと考へる、そこでゴテ／＼八ケ間敷いふのであります。

私は一般支那人（これも昨今青年の間には隨分例外もあるやうですが）の間に一つの特色を見出しました、それは極めて簡短な事ですが、彼等はどんな時でも自分が惡かつたと決して言はないことであります。例へば喧嘩などして居る時でも何れか一方が私が惡かつたといへば、何の譯もなく片つくことであるのに、決して相手方に惡かつたと言はない、双方共に彼が惡い、彼が惡いと言ひはつてゐる（これには萬一何れか一方が、私が惡かつたといふならば其人は罪を認めた事になる、さうなると周圍から責められる、と恐れてゐるからかも知れませんが）兎も角、惡い／＼で別かれて終ふのであります。又何にか自分で過ちをしても、たとへそれが其の過失の

爲めに自らが負傷などした時でも決して自分の過失といふ事を云はないのであります。必ず何かに其罪を負してしまひます。私は之を支那人の特色であると思ひます。(歐米人などのことは存じませんから或は支那人の特色とはならんかとも思ひますが)

私は此の自分が惡かつたと言はないといふ事は、支那人の特色であると思ひます。今私はこの極めて貧弱な一つ二つの材料をもつて、全般を推すのは少々自惚れが過ぎるかとも思ひますが、先づ間違ひはないつもりです。

私は支那人の前の車賃問題でも喧嘩でも過失でも何れも其出發點が同一精神から出て、或ひはゴテつき、又自分が惡いと云はないのであると思ひます。然らば其出發點は何處であるかと申しますと、それは自己責任の回避又は轉嫁といふことであります。短距離の路を走つても自分の速力の鈍かつた爲めに多くの時間を要し、自分が弱いために疲勞も甚だしいのであると考へずして、直ちに多くの時間走つたから疲勞が甚だしいから、道が遠かつたのであると決めてゴテ〱云ふのは畢竟道路に自己の責任の轉嫁をして居るといふてもよいと思ひます。

喧嘩して先方が惡いといひ張り又自己の過失さへも、何者かに負せる、之れ明かに責任の轉嫁であります。即ち自分を完全と考へ又其行爲を完全と考へる、そして自己の責任を免かれんとする其轉嫁先が人である時に其相手も同じく責任を他に轉嫁せんとするが故に其處にゴタ〱が生じるのであります。若しも其轉嫁先が人間以外のものである時には決してゴテ〱は起らないといふ點に到達した。即ち日が惡い、年が惡い、方角が惡い、遂に運がなかつた運が惡かつたと。敗者の責任轉嫁先が出來たと思ひます。この發見は自然に其反對の日が好い、年がよい、方角がよい運がよかつたといふことを伴つて來るのであります。實の處私は此の責任轉嫁が遂ひに支那の國、そして支那人をして今日に至らしめたものであると考へて居ります。

支那人にあつては此の責任轉嫁は實に一種の術であります。此の術が進歩すればするほど、支那の國と支那人とが衰亡と墮落に陷つたものであると考へて居ります。占ひの進歩こそ國家國民の退歩と正比例するものであると考へます。實際此の責任轉嫁術は支那に於て非常の發達を遂げて居ると思ひます。或は其極度に達して居るのでないかとさへ思はれるのであります。私は占ひの戸籍を、易の故郷を此處に見出したのであります。次に一つの例を申し上げませう。

或る一人の商人がある、或る人と商賣をして大損失をしたと致しませう。先づ其人は第一に相手が猾猾であると、自分を騙したのであると考へて居りましたがつひに、其考へは日が惡かつた、年が惡かつた、又は其方角が惡かつたとなり尚ほ進んでは運がなかつたとなつて決まるのであります。反對に儲けた方では同じ樣に結局運が好かつたとなるのであります。決して自己失敗の原因を考へるとか調べるとか研究するとかいふことはありません。

支那人間に運氣好、運氣不好といふ言葉がありまして其言葉が、すべての最後の審判者である理由が之れで判明すると思ひます。

支那人の責任轉嫁が進歩して遂に、占ひとか易とかいふものに到達したのであると私は斷定するものであります。

現在の日本にも隨分占ひとか、易とかに迷はされてゐる人が澤山ありますが一度支那へ來てそして此の實際を御覽になつたならば、恐らく常識のある人であつたならば、直ちにそれが成程一つの迷信であることに氣がつかれるであらうと思ひます。尚一つ追加いたしますのは私が易や占ひが敗者から來たといふことの一證であります。それは人が成金時代に決して占ひなどに賴らない、寧ろ一笑に附して居るが、一朝失敗してしかも其失敗が、又は世にていふ不幸なるものが續く時に初めて何も氣安めとか、參考の爲めとか云ふて占つてもらふ、此の順序は日本でも多く見る實際であります。此れで占ひが敗者から出發してゐることが判ると思ひます。

# 自己否定よりの生命

金井爲一郎

「若し我に從はんと思ふ者は己を棄て其十字架を負ひて我に從へ其生命を全ふせんとする者は之を喪ひ我爲且つ福音の爲に生命を喪ふ者は之を得べければなり」マコ傳八〇三一―三八。此の句と同意を現す言は聖書に何度も見出す事が出來る。ルカ傳には、「日々己に克ちて其十字架を負ひ」とあり、ヨハネ傳には一粒の麥の地に落ちて碎くる如く其生命を捨つる事によりて多くの實を新に結ぶ事を說き給ふて後「其生命を惜む者は之を失ひ、其生命を惜まざる者は之を存ちて永生に至るべし、人若し我に仕へんとせば我に從ふべし」ヨハネ十二〇廿五、廿六とある樣に、基督は弟子の信仰が稍進み自らの死を彼等に預知せしめ給ふた頃から明かに誠の生命に入るには自己否定によつて我が後に從ひ神の意志に服從する生涯を取らなければならぬ事を示し給ふた。此は一見矛盾の樣に感ぜられるが古來基督に效ふた偉大な敎師等は皆其言葉の眞實なる事を保證して居る。パウロは「己」を肉と言ふ言葉を以て現はし又「生れつきの儘なる人」とも又「我」とも呼んで居る。從世の學者は「自然」「自我意志」「自己」等樣々に呼んで居る。さらば一、此己とは何か、二、捨てるとは何か、三、其生命を得る道は如何に、就いて暫く共に學びたい。

一、基督は主の祈其他に於て敎へて「第一に神を己の中心とすべし」とけれども私共は生れ作らにして自己中心の人間である。萬人の心を支配してゐるものはやはりこの自己中心である。即自己の爲には世界の何物をも惜しまぬ心に充たされてゐるのであ

る。而して、この自中己心の精神の者は主の教へ給ひし所にある如く「爾名を尊崇させ給へ」「爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ」と眞に祈る事が出來ない。すべての惡の源は己、我欲である。キリストは善き木は善き實を結び惡き木は惡き實をむすぶと仰せられた。基督敎の救は、口で神の名又は念佛を稱へる事のみではなく、內が善で初めて善行が出來る。パスカルは眞にキリストに贖はれた者でなければその人の祈さへも神の厭ひ給ふ者であると言ふた。神を中心としない時、即自我が中心である時はその人の業は神の御前に何等の價値もない。又自己意志が種々の形になつて此世界に現れたものが罪惡であつてこれはガラテヤ書五〇十九―廿一に說明されてゐる。人間の性的の要求の汚、嫉妬飲酒凡て爭ひ僞等の根源の性質は肉である生れつきのまゝの人は神の聖靈を受け容れる事が出來ない、故に此の性質から解放される事が眞の救である。然し自力では到底この肉の大なる力に勝ち得ぬことを感ずる時罪に對する苦惱と己の無力を痛切に感ずる古來の聖者は皆之が爲に涙を絞つた。この苦惱の最中に神は我々に助を與へ給ふ即、イエスキリストが我々の靈に手を觸れた時人間の肉の壓制から解き放されて恩寵ふかき神の光に浴するのである此時喜と感謝とが私共の心に湧き出づる。ルーテルはいふた、我々は價を以て賣られたる醜業婦或は奴隷の樣に似て、上に或勢力があつて我々を支配してゐるのであつて靈は好まぬけれども罪の力が強くて之に支配されて悲鳴をあげる。此の時キリストにより我等はその束縛から放たれ救はれたのであると、彼の潔きと生命と恩惠により我々の生活は新らしく生き望ある歩みをとるのである。我々は斯くして贖はれ自由にされたが故にキリストに會つて以來低い「己」と緣を切つた。そして基督に賴る生活をするのである。即 基督敎徒の生活は 己の意の儘に從はせんとする凡ての我欲を棄てゝ我は基督の者、彼の外何物も束縛されずと明言しつゝ我に從へとの御言葉

のまゝに生きるのである。我々の心はキリストが支配するにあらずば他の何物かゞ統禦する、即キリストか自我意志かである。かくて我々が己に從ふ事は丁度キリストを戸の外にしめ出す事である。而して基督を主として彼に從ふ時己を十字架につける事である。言ひかふれば己を十字架につけ死を宣告する事である。これをポーロの言葉によれば「若しも靈により肉の働を殺さば生くべし」ロマ書八〇とある

又聖ベルナードの或說教に「自己意志を否定する事により我々は何物も失ふことがない、のみならず却つて宇宙を支配する所の意志を與へらるゝこの意志は即愛である。自己意志に幽閉され捕虜となつてゐる者がどうして他を愛し惡を憎み善をいつくしむ事が出來やう。自我意志は神の榮光を奪ひ私の利益の爲に神の榮を被ひ隱す敵である。神は之を罰し給ひ取り去らうとしてゐらつしやる。而して一度自我を棄てる時にはその人には地獄は存在せぬ」と又彼は祈つて「我靈の只一人の主なる主よ。汝の位を竊ふ敵我心に動きつゝあり、速かに來り之を討ち給へ我心は汝の外に王なければなり」と言ふて居る彼の樣に弱い肉體を有ちつゝも全歐洲に驚くべき大感化を與へたのは彼が自我を滅却し基督に生きる事によりてのみなされたのである。

又ルーテルの非常に推賞した無名氏の著「セオロジカゲルマニカ」の中に「自我が去らないでは決して善は我が中に生れぬ。又地獄に於て燒かれるものは自我意志の外には何物もない」と。ジョンウエスレーは「己を十字架につけるといふことは本來の自己に死し神に生くる事である。信者の進歩しないのも中絶して了ふのも此點に於て不足するからである自己否定は神秘家のみの說く處と思ふな、凡て靈に滿された人の說く處である」とゴルドンは「我々の信仰に進む時前に二つの道のみがある。一は「我に從へ」と言ひ給ふた路にして狹く、他は己の喜と欲望に從ふ廣い道である。前者は登るに難く一見して思はるが、此路を取る時は、その道案內なる基督に

より、歩は次第に容易になり又假令苦痛があつてもその中に此に優れる慰が常に我等に伴ふ。しかし從者は行くに從ひ路は次第に下りつひには急に落下して永遠の滅亡に入るのである」と言ふた如くになる

二、然らば私共はいかにして基督に從ふべきであるかといふに、これは肉に於ける所の生れたまゝの人には全く問題にもならぬ事である。然しイエスに接近してその無限の愛をしみ〴〵と感ずる事により又この汚れし我が靈はいかにして救はれしかを考へ悟る時イエスが我々の保護者絶えざる助け手であることを自覺して來る時自我を棄てゝキリストに從ふ心が湧き起り、此君の爲ならば、自己を捨てゝ何者をも惜しまぬ樣になつて來て、誠の獻身をするのである。之は當然の所爲である。ロマ書十二〇一—二

此より後信者の戰は自力にあらずして常に基督の力による。我等の力、にして義贖なる基督に「我が主よ、我が王よ」と言つて心を開く時中なる闇は消え去るのである。我に從はむと思ふ者は、の意味は、敢て我に從はむと欲する者はでありその意志を持つならば又キリストに我等自身を捧げ、何處までも從はんとするならば神は弱き我等に力を與へ、立派なる勝利者とし給ふ。此れが即靈により、肉を殺す事である。實に基督は我等の靈の醫師であり、我々の中の隱れた病根を知り給ふから、それを癒やさむが爲に痛くとも、或は針をさし、或は刀を入れて、病源を去らねばならないかもしれぬ。即地上の功名心や貪は彼等の病である事を心を平らかにし謙遜し基督の前に立つ時神は明瞭に我等を教へ給ふ。自我は假令いかに美くしい形を以て現れて來ても我等が思ひ切つて之を振り捨てねならば神の前に眞に生きる事が出來ない。若し基督に從はむと思ふものは自我に向つて否と言ひ而して日々十字架を負ふて我に從へと、我等は教へられたのである。

三、かく基督に來る者は神の慰を得神により、潔められ永遠の生命を得るのである。神の意志と合一してそこに永遠性を宿し、神と交るの關係に入り、

不朽の業に參加する。神はかゝる人々に向ひ「子よ汝は我が國を繼ぐべきものなり」と御聲を下し給ふ。又「主よ〳〵と言ふ者悉く天國に入る能はず只我が天に在ます父の旨を行ふ者のみ」とイエスは說き給ふた。

　パウロは我等が極めて小さい輕い僅の苦しみは、大なる重さ、永久の榮を我等に與へると言ふた。我等の此地上に於ける苦痛も快樂も實に小さい、瞬間的なものであるが此の僅の消え果つべき欲望を捨て神の意志に從ふ時、我等は神により、精神的にこの何百倍にも當る慰を與へられ又來るべき世に於て、永遠の生命を與へらるゝ、之は其の約束である。影の樣な地上の喜びにまさる永久の榮ある實在の國に入らんがため、神は我等を招き給ふた。イエスは之等の地上の欲に、向つて斷じて「否」と言ひ、彼に向つて「然り」と答へる事を我等に要求し給ふ。かくして「神已に從ふ者に賜ふ聖靈」が絕えず宿り、その人の中に力を與へ、弱きは強くせられ、神の性質に化せられ、又大なる感化を四圍に與へて、地上に神の國が擴められるのである。

　終りに一つの例を引きたい、ある夏のテント集會に於て一人の敎師が話をして後「今日我に從へ」と基督があなた方の前に立つて命ずるならば、果して如何なる事でも從ふだらふか」との問を發した。此時一人の青年が天幕の蔭で一夜を祈り明し、未明頃その敎師の室に、彼は訪れた。其顏は感激によつて蒼く、言葉には強い決心を現はして居た。

　彼は語つて言ふに「昨夜私は心に決定し難い問題の惱みを持つて一人夜闌ける迄祈つて居りました時私の前に基督は實際に現はれ給ひました」と「其御姿は昔十字架に釘き給ふた時の樣に茨の冠を戴き足は裸足で靜に步み給ふ一步々々の後には血が草を染めつゝ、此方に近より給ふた。其慈愛に滿つる御顏を私の方に向けて手をさし延ばし給ふた時、自分は一切を捨てゝ汝に從ひますと答へて、胸の惱は消え失せ、感謝と喜が滿ち溢れました」と。彼は何百萬

の富を親より受け嗣ぐ事の出來る亞米利加の青年であつて彼の前には地上快樂と功名とは悉く待つて居る樣に見えた。然し彼は之等を悉く捨てゝイエスに從ひ、御旨を行はんとして福音の使者となつて支那の內地に來て傳道し、使命を終つて此世を去つたのである。あゝ、其先は如何、彼の頭に輝く榮の冠を見ないか、瞬間の快樂を追ふても既に地上に無かるべき人であるが、永生の喜は今や彼の有となつて居る。

此く我等は已に死ぬ事によつて基督に生くるのである、我が罪の爲め榮を捨てゝ地上の人となり、十字架に釘き給ふた、基督の爲めに此身を捧げるとせば何たる光榮であるか、我等をして今より後己の爲に生きずして、主の爲に生くる者とならしめよ、我國はかゝる人を要す、世界はかゝる人を要す。此世の生涯は如何にもあれ、神と倶なる永遠の世界を我々の物としたい。

# 人種問題の解決

爾曹は皆キリスト・イエスを信ずるに由て神の子となれり。ガラテヤ書三ノ二十六

額賀鹿之助

○

巴里の平和會議に日本の代表者は人種平等案を提出したが遂に不成功に終つた。永久の平和を來らすべき根本條件の一つは慥かに人種平等の思想でなければならぬ。昔から戰爭といふ戰爭は殆んど人種と人種との衝突であつた。勿論、內亂といふものもあ

るが、異人種に對する感情は同人種間のそれよりも激しいのである。夫故に人種的僻見が世界の各國民の心から取去られない限りは我々の理想とする如な平和は來らない。今度のワシントン會議に於ても太平洋問題が論議されることであらう。而して所謂政治家達は軍備縮小に由つて太平洋の波がいつまでも靜かになると思ふであらうが、それは一のユートピヤに過ぎない。素よりそれも重要な平和の要素には相違ない、併し更らに重要なる問題は人種的差別心の超越でなければならぬ。

○

余は過去六年間米國に在りて色々な人種に接觸して微妙なる感情の作用を實見することが出來た。アメリカは謂ゆるコスモポリタンの國で色々な人種の雜居である。アングロサクソン、イタリヤン、ヂヤーマン、グリーキ、アイリッシユ、スパニッシユ、其他有ゆる民族の寄合ひである。顏の色から謂つても白い者ばかりでなく、黑もあれば赤もある。其中に僅かの黃色が交つてゐる。米國人てふ色彩は日本人の夫れの如に決して單純ではなく極めて複雜である。而かも色々雜多な人種が大きな星條旗の風呂敷の中に包容されてゐる。其統一の力は自由平等の思想である。一度この思想が薄弱になれば散々ばらばらである。忽ち內亂が起る。色と色、族と族との衝突が始まる。それだからアメリカでは世界戰爭後殊にアメリカニゼーション即ち米化運動が盛んに行はれてゐる。米化は即ち消化である。異つた國語、異つた風習を有つた人種を米國てふ大きな胃囊の中に呑み込んで消化して、一つの語、一つの氣風にして了うといふのである。多くの人と巨額の金とを費やして努力はしてゐるが、不消化の分子も亦少なくないといふことは爭ふ可からざる事實である。近い話が、彼の偉人リンコルンが生命を賭して戰ふてまでも奴隸を開放して、黑人に自由を與へたるに拘らず、黑人に對する白人の感情は昔と今と果してどれ丈の變化があるであらうか。甚だ疑はしい。彼等は

依然として差別的の眼を以て見られてゐるのである。政治的には黑人も白人と等しく市民權を與へられてゐるのであるから自由民であるけれども社會的には全く別な待遇を受けて居るのである。余はアラバマ州の或教養ある黑人と話した時に、端なくも人種上の問題に及び、余は其黑人に對ひ、「あなた方はどれ程までに白人から差別されるか」と質問した。すると其黑人曰く、Even in the Jail「檻獄の中ですら」別にされると。余はこれを聽いて實に彼等の境遇に同情せざるを得なかつた。黑人は白人からリンチ（私刑）と曰つて石にて打ち殺されることが屢々ある。文化を以て世界に誇る米國に於てかゝる野蠻の行爲が今日猶ほ行はれるなどゝは全く想像も及ばぬ事ではないか。是れが人種的感情の發露でなくて何であらう。平和會議に於ける人種平等の叫びに對して最も歡呼の聲を揚げたものは米國の黑人であつた。

○

排日問題は久しく米國加州に論ぜられてゐるが、今日猶ほ解決しない、否却つて益々甚しくなる傾向がある。最初は殆んどカリフォルニヤにのみ限ぎられて居つたが、今日では全米國に此感情が漲つてゐる。素より黑人に對するとは異つた方法ではあるが其の精神に於ては殆んど五十歩百歩である。米人から見れば日本人は不同化の國民であるとか、國家的觀念が强いとか、經濟的競爭の敵であるとか、米國を東洋化するとか種々雜多な理屈をつけるのであるが、腹の底を叩いて見たならば矢張、人種的僻見が主なる排日の理由となつてゐるではあるまいか。戰爭中には獨逸人に對する感情は實に極端と思はれる程烈しいものがあつた、ジャーマンと曰へば忽ち顏をしかめる。學校などでも獨逸語の教授を廢するに至つた。桑港にジャーマン・ホスピタルといふのがあつたが、此の病院ですら改名したのか、させられたのか名が變つた。唯何のことはないジャーマンといふのが惡いのである。所謂排日屋なるものは日本

を第二のチャーマンであると云つて民衆を煽動するのである。それ故に氣の早い米國人は或ひは日本を恐れ或ひは日本を憎む。加州の日本人は寫眞結婚で盛んに本國から花嫁を迎へて、澤山の子供を產むから、今に日本人の數が白人のそれよりも多くなるなどゝ愚にもつかぬ說に動かされる。公平な眼から見れば、米國建國の精神が自由平等である以上、如何なる者の子孫であらうとも、之れを正當な米國の市民として取扱ふべきであつて、多ければ多いだけ喜ばねばならぬ譯ではないか。彼所に生れた日本人の子孫は顏の色こそ親のそれと同樣でこそあれ、其の精神感情に於ては全く米國人であることは爭ふべからざる事實である。而かも猶ほ日本人の子供が殖ゆることを好まぬといふからには、其處に矢張人種的の感情が働いて居ることを否むことは出來ぬ。

○

然らば如何にして斯る人種的感情を取去ることが出來るか。既に感情であつて理屈でない以上、論理的に說明して諒解する譯のものでない。何物かの力によつて其感情が融和されるのでなければ異つた人種が一つにはならぬ。これが單に政治問題であるとか思想問題であるとかいふならば、どんなにでも解決の途もあるのであるが、厭なものは厭だと云つて了へば、最早如何ともすることは出來ぬのである。唯厭でないやうになる「時」を俟つより外はないのである。互に厭でないやうになれば、社會的生活にも一緒になれやうし、家庭生活をも共にすることも出來るのである。さうなつて結婚も平氣で出來るやうになる。一方で米化運動をしながら加州の法律で日本人は米國人と自由に結婚するを許さぬといふのは矛盾の甚しいものではないか。あれ程憎んだ獨逸人でさへ戰爭が終つて時日が經つに從つて感情が次第に融和されるといふのは、彼等が顏の色が同じで互に結婚が出來るからである。更らに一歩進んで、顏の色の異ふものでも結婚するやうにならねば、人種平等の理想に達することは難かしい。

余は以上米國文化の缺點と思はれる方面を述べたが、決して余は米國の長所を認めぬものではない。烈しい排日運動の中にも徹頭徹尾日本人に同情して辯護する正義の士も尠くない事を知つて居る。色々な人種を一つ米國魂の中に包んで世界の進歩といふ大きな目的に導いて行く所に兎も角も米國の偉大を認めるのである。そして何といつても米國人の血液の中にはピルグリム祖先の宗教心が今猶ほ活きて居る。それが無かつたら米國は少しも尊敬すべき價値が無い。余は飽まで彼の暗黒面を見ないで、ブライ・サイドを眺める。彼の中には「爾曹は皆キリストを信ずるに由て神の子となれり」――「斯る者の中にはユダヤ人、またギリシャ人、或ひは奴隷あるひは自主あるひは男あるひは女の分なし、蓋なんぢら皆キリストイ・エスに在て一なれば也」といふ基督教の精神が生きて居る。夫れ故一時烈しい感情に囚はれることがあつても、此信仰の高い所にまで進めば俄然として我等は皆同胞兄弟なりてふ美はしい心が覺めて來る。此所は議論でもなければ理屈でもない。信仰である。理解である。我れに此信仰あり。彼れに此同じ信仰あり、斯くて始めて人種問題は解決される。

――一九二一、九、三――

○ 月清し街の甍は靜なり

○ 月清し茶番にどよむ祭の子

○ 燈籠に娘かしこし月白し

○ 有明の棚引く雲ゆ月こぼる

○ 宵の主は知らずともがな月澄めり

（千兵衛）

# 英　文　欄

## CARRY ON

In the seventeenth chapter of Matthew you may read of how Jesus with three of His disciples went up on a high mountain, and there had the wonderful experience of the Transfiguration, when they heard the voice of God and felt His presence. It was Peter who said from his heart, "Lord, it is good for us to be here". It was a deep experience, and it gave the disciples a new consecration to their work, and a deeper reverence in their hearts. They must have been sure as they came down from that mountain, that never again would they be weak or faithless. Read a little farther along in the chapter and see what was the first thing that they saw when they came down among the people. A poor epileptic boy whom they had failed to help. From the height and glory of their experience they came back to everyday life,- and the places where they had failed. It was not a very pleasant thing, probably, to have this kind of thing come to them, when they wanted to be so strong and fine. They asked Jesus why they had failed, and He told them that they had not had faith.

Did you ever have a very wonderful experience, at a summer conference, or at a service, or in the out-door world, and feel that the experience would stay with you always and that you would never be small or irritated again, and that you knew God was in your heart to guide you, and *then* found that a baby's crying, your small brother's teasing, or somebody whom you didn't like could make you feel cross and unhappy and abused, and even if you did think of the promises you made in your heart during the time when you felt so near to God, they seemed to you like hasty things that were not real. Back into real everyday living again, and the mountain-top is forgotten! Where is the real test of our Christianity?

There is a sentence from Mathew Arnold that is a good one to remember, -"Try to see life steadily and see it whole". When we can learn to do that, then we have gained something that makes every experience that comes to us a part of our actual life. When we have so strengthened our faith in God that we trust ourselves to Him completely, then we have acquired a quality that will make us steady and sure no matter what happens to irritate us, to make us unhappy. All the people whom we love and trust have that quality. To people who have this faith, the mountain-top experiences are very precious things, that make life sweeter and more filled with meaning, that give refreshment and strength for the hard things ahead.

During the war the soldiers had a phrase which they shouted to each other for encouragement when the battle was very difficult, and they began to be afraid. "Carry on!", they shouted, and in the hearts

of each of them was born again the courage they needed, and a new high resolve to be true to the cause to which they had dedicated their lives. It is said of the French that once after the Germans had been pursuing them for ten days, and they had been retreating farther and farther back, a new courage came to them and they turned about, tired and discouraged as they had been, and won a victory out of a defeat. "Carry on", was in their hearts. and when they tried to go back after they had failed, they hnd the strength to do it.

We, too, must carry on the things that are given us in our mountain-top experiences, carry them on through the times that have little that is pleasant about them, carry them on in the midst of people who irritate us, and whom we do not like. We must translate all the glory of our happiness into something which we can pass on to others. Do you remember how Jesus showed His disciples that the finest quality for them to have was lowly service? He washed their feet, a thing which was only done by servants, and told them the greatest man was the one who was the servant of the rest. What kinds of service are we trying to get away from these days? Are there any places where we feel too good to serve, where we cannot carry on the love of Jesus that is in our hearts?

But if we are to maintain that spirit of steadiness and sure faith through times that are not very happy, we must have a source of strength that is far beyond ourselves, that steadies us when we are weak and discouraged. We need to be close to God, to seek from Him the power that can make us smile through a weary and tiresome day. We cannot "carry on" with our own little strength, we need God at the very heart of us, to give us the new courage. If we can just lift up our hearts to God for a moment in the midst of a busy time when we need to be finer and stronger in our spiritual life, then we can obtain the power we need, and the beauty of the mountain-top experience will flow out to others in thesweetness and steadiness and calm that Jesus promises to all those who call upon Him. We need to be so much stronger, and we are so foolish not to have that help when it is so near and so easy to obtain. God is just waiting for us to come to Him to receive from Him the power we need.

"Lord, what a change within us one short hour
Spent in Thy presence will avail to make!
What heavy burdens from our bosoms take;
What parched grounds refresh, as with a shower!
We kneel and all around us seems to lower;
We rise, and all the distant and the near
Stands forth in sunny outline, brave and clear!
We kneel, how weak! we rise, how full of power!
Why, therefore, should we do ourselves this wrong,
Or others that we are not always strong;
That we are ever overborne with care;
That we should ever weak or heartless be,
Anxious or troubled, when with us is prayer,
And joy and strength and courage are with Thee?"

# 久遠の女性

二階堂眞壽



「久遠の女性」といふ演題はゲーテのファウストより採つたものです。すなはち"Das Ewig-weiblichkeit Zicht uns hinan"「久永の女性はわれらを高きに導く」といふ著明な句です。この句はファウスト中にあることは知つてゐましたがファウストのどこにあるのか知つてゐなかつたのです。近頃アッシジのクラゝの傳を記きました時にこの句の出所を明かにして置きたかつたのでファウストを始めから繰り返してみましたが第一巻目には見當りませんでした。下巻の方も始めからめくつてみましたが見付からなかつたのですが、いよ〳〵最後の時にこの句があつたのです。終末からみれば第一番に見付かるのであつたのです。

ファウスト全巻を結んだ句が「この久遠の女性がわれらを高きに導く」云々の句だつたので、今更のやうに感慨を深うしたのです。

御承知のやうにダンテが地獄や錬獄を遍歴した時にはローマの詩人バアジルに案内して貰ひました。しかし天堂界を観るときは最早やバアジルは自分の力の及ばざるところとして辭して、ベアトリチエがダンテを案内するのであります。文字通りに久遠の女性がダンテを高きに導いたのであります。

實際男子は多くの點に於て、女子よりも卓越してゐます。然し女性は男子の胸にあつて、更に卓越したものとせられるのであります。詩聖ダンテは確かに鮮たるフロレンスの一少女をダンテ自身よりも逈

かに貴きものと感じたのであります。彼の詩は彼女に對する敬虔思慕の念から生じたと言つても差支ありません。ダンテにとつてベアトリチエは單なる肉身の一女性ではありません。實にダンテの理想の投射であり、宗敎的思慕の對象でありました。彼女はダンテにとつて久遠の女性だつたのであります。

女を忌み嫌ひ、痛罵して生涯結婚しなかつた「寂しきニイチエ」でさへも「完全な女は完全な男よりも、より高き人間の型である。またずつと稀れなものである」と言つてゐます。恐らく彼の胸奥に深く秘めて曖にも出すまいとした言葉をふと過つて洩らしたものかも知れません。

人類の憧憬の的は女性です。それが凝つてマドンナの崇拜ともなり、中世紀の騎士のチエヴアルリの精神も生じてくるのであります。

近代の佛蘭西でユースマンスやヴルレエヌなどのネオカツリシズムの運動もやはり完全なる女性に對する憧れであります。

荒みゆく人類に對して慰めと光明とを與へるものは眞の女性です。

「女性の胸にその休み場を持たなかつた人に未來に關する眞のいかなる感じも嘗つて宿つたことがあるであらうか」とマアテルリンクは言つてゐます。また諺に女の結んだ鎧の紐は解けないと言はれてゐます。弱きものよ汝の名は女であつても城を傾けるのも女であります。

眞の女性はたしかに人類に光明を與へます。癩病人の膿をもすゝられたといふ我邦の光明皇后、それからアッシジの聖クラヽ、――クラヽといふ名の意味は「輝くもの」といふことなのです。それはクラヽの母のオルトラーナが祭壇で安産を祈願してゐた際に、「汝の生むところのものは全世界の光となるべし」といふ托宣がありましたので、その名がつけられたのだといふことです。

扨て人は天使を想像するのに女性の姿をもつてし

ました。これは意味深い事實だと思ひます。一體天使とは何んでせうか。私は思ふのに天使といふものは私共の心の奥に住む魂の象徴だと思ひます。舊約書の古い文獻では天使は神の子になつてゐますがこれも面白いことです。

「衷なる人」とか「甦生した人」といふことは、人心の奥に秘む眞の魂や心靈の覺醒した人をいふのです。かの青い鳥の二人の子供が青い鳥を探すのは何を象徴してゐるかと言ひますと、あれは心靈を探しあてれば眞の幸福が得られるといふことを意味してゐるものです。マアテルリンクはある戯曲の中に、人の胸は鳥籠で心靈はその中の小鳥のやうなものだと言つてゐます。かのチルチルとミチルとが大きな籠を下げて青い鳥を探すのは全く心靈の探求であります。しかもその青い鳥は外部には得られなかつた。假令捕へてもそれはすぐ死んで仕舞ふのであつた。それは反つて彼らの家庭の中にあつたのであります。これは眞の幸福は外界に求めても空しく、われらの衷に求めなければならぬことを意味したのであります。

梢から梢に飛んでゐる小鳥はなんて可愛らしいものでせう。播かず刈らず倉に收めす、それでも天の父に養はれて睦しく暮してゐます。小鳥を心靈とシンボルとしたのは面白いと思ひます。中世紀の聖書によく天使をば全身小鳥の形にしてたゞ頭だけを人の顔にしてあるのをみるでせう。鳩のやうな純白な翅を光の中に翻へしながら飛翔する美しい女性の姿が天使の象徴だと思ふのです。

女性の美しさは鳩の如き柔和さと蛇の如く賢き直覺力であります。理性の推理に依らず直ちに直感に依つて事物の眞相に透徹するのは實に女性の神秘的な美しさであります。これがまた女性が魂の本質に近い所以であります。「女性は神に近い」と言はれてゐるのもこの爲めである。ファウストのグレートヘンが惡魔の使であるメフエストフレースを何とはなしに嫌ふのはやはりこの女性の美しい直感でありま

す。

また女性は幼くしては親に從ひ、長じては夫に從ひ老いては子に從ふと言はれてゐますやうに從順の美德を持つてゐます。絶對歸依の感情が信仰であるとすれば、女性は男性よりもより信仰的態度に近いものであります。人類は神を愛さうとするよりも神より愛されようとするものではないでせうか。

キリストは永遠の新郎で人の心靈はみな永遠の女性であつて、永遠の彼の花嫁となるべきものではないでせうか。天國に甦りし人はもはやこの世の如く娶り嫁がないのであります。

最後に神秘思想の研究の如きはむしろ永遠の女性そのものゝ研究に外ならないやうな氣がします。由來神秘思想家には女性が多かつたのであります。

女性に生れたことは或意味に於て男子に生れたよりもより幸福なことかも知れません。

# 神の國

立教大學教授 ドクトル、オフ、フイロソフイー 小島茂雄

昔から黄金時代を夢み、豫想して居た。今猶これを期待して居るが、これを三面から見ることが出來る。

一、物質的繁榮
二、義の支配と勝利
三、神との交

舊約の時夢みた天國は、物質的に豐に充ち足はつた世界であつた。確かに神の國の豫想の一つの中に物質的繁榮があつた。

義の支配と勝利も舊約時代に起つた思想で、律法

を守ることによつて黄金時代の來るものと思つて居た。而して義の完全に行はれる時代を望んで居た。團體生活の完成の爲に受くべきものを受け、與ふべきものを與へる社會的正義が定められてあつても行はれてない、不正な者が榮え、正義な人が貧困、苦痛を受けて居るが、吾々は何時かは此世で公平になる事を望んで居る。例へば彼の芝居で大名は舞臺に出でては偉らさうにして居るが、樂屋に入ると却つて自らが呼び捨にした僕の汗をふいてやつたり、いろ〳〵仕へて居る。ふさはしくないものを受けてる者が公平な扱を受ける事を望むは、黄金時代に求むる當然のことである。紀元前七、八百年頃正しき要求を持つて居たものが正義の勝利、支配を黄金時代に求めた事がダニエル書の七章、八章に出て居る。

神との交。豫言者は幻を見、夢、現の間に神の聲を聞いて召されたと言ふ自覺の下に立つたのであるエゼケル書十一ノ十九――廿、卅六ノ廿六――廿七、卅七などに此思想が見られる。

此せちがらき人生に於て、黄金時代に義の時代を望むと共に、神との交の經驗を閃視ながら吾々は持つて居るが是が更に圓滿になると思ふ。物質的繁榮も正しく受入れらるゝ道がある、而して神との交も一增充實した形で入來る。義の道も習慣にたゞして正か邪かを見るのみでなく、內面的に照し、正邪に非ず、善か、惡かを知つて行く道をキリスは說き給ふた。特殊の境遇に囚はれた判斷で、正しきに合ふ合はぬでなく、適當な道で義を主張する。神との交はイエスは、昔よりも更に深く、親しく感じ彼の全身全靈に充ちて居た。人種によつて支配されず、人を人として差別なくあつかふ。洗禮の時も然り。天國は近づけり悔改めよの聲の下に多くの人が來たがイエスは同じ心で接し給ふた。自らより離れ一般人性に於て一致す。人と我との區別を感ぜずして同じ者の心となるのである。イエスは人を離れて山に入り神に祈り給ふた。個人的の祈を神に常にし給ふ

た。キリストは靈の偉大な力を有し、水と靈とをもつて洗禮をほどこし給ふた。神との交が黃金時代に夢みられて居たが、キリストは是を避けず、否實にイエスの天國、ユートピアにはこれが必要であつた。物質的盛榮に對しては、後世の人が持つたやうな嫌厭な心を持ち給はなかつた。物質が生活の中に入り來つて第一のものゝ占むべき場所を占めた時に誤りがあるのだ、生活の中心に物質を置かずして、相當に置かるゝべき處に、是を置けばよいのだ。

　舊約時代に於ける律法の發達と同時に、黃金時代の豫想も盛となる。此時の代表者はモーセ、エリヤの出現である。さてイエスの天國は舊約からしてどんなに變り、如何なる天國觀を持つて居給ふたか、これに假設的定義を下せば次ぎの如くである。

「天國は心靈の新秩序にして神及び人と人、人と自然間の完全なる相互關係なり。」

　イエスの教の中には神の國は爾等の中にあり、心の内にありとある。神の國は奴隷があつても、婦人が壓迫されても、小供が顧みられぬとも、此世のものは皆消えてしまうのである。たゞ消えぬは心の中の天國だと、是れ果して、天國に對する適當の解釋であらふか。神の國は我々が其內にあつて住み得る客觀的のものでなければならぬ。言ひ現す場合に言ひ現し方がない故に、かく言ひ現したので、餘白をおいて解釋をせねばならぬ。ユニックな單一の天國觀となつてしまふ。人其の心に入らずば知り得ない。お互にもつてるものを言ひ現して共問の立脚地に立たうとしない時に孤立する。神秘主義に徹底することは出來ない。共同性を要する。天地宇宙間には、自らと同じ身體と、心とを有する者が居る、自らの神秘觀と異ふかも知れぬが、是等の個々から離れて、こゝに偉大なる者があつて、是がほんとうの繪を描く者であつたならば、これが眞の天下である然らずば、唯我獨尊の世となるであらふ。

　こゝに蜘蛛が一生懸命で網をはる、人がその糸をちよきんと切るならば、此出來事は、蛛蜘には不可

解である。人間のことも、これに類した事がある。人には不可解でも、人よりも更に大なる手があつてかやつて居るのである。

我々は各々ユニックなものを持つて居る。小供が兩親の知らぬものを聞く、そして單一のものを有つ人間の有する天地宇宙の考は其色彩より言ふ時は、千差萬別である。詩人の此世離れをした美の觀もあらふ、凡てが集る時に此丈のものが出來るので、心の中の神の國はこれに無條件で受け入れ得ない。

神の國は心靈の新しい秩序であると前に言つたが馬可四ノ廿六—廿九「また曰ひけるは神の國は人種を地に播が如し、日夜起臥する間に種はえいで〻成長ども、其然る故を知ず、それ地は自から實を結ぶものにして、初には苗、つぎに穗いで、穗の中に熟したる穀を結ぶ。既に熟は稜時いたるに因て直に鎌を入さする也」種と播く者、されども育てるものは「自ら」である。無意識中に神の國は成長する。自覺は必要であるが、これが信仰生活の全部ではない。知らず〳〵の間に成長する。天國は我の内にのみあると言ふよりも、更に客觀性を有す、神秘の世界に於て、秘密の合ひ言葉の生活をせんと言ふのみではない。イエスの人生觀は心の中のみ、即ち主觀性のみでなく客觀性をも必要とする。

有機的關係、人と人、人と神、人と自然とが完全な、有機的關係を有せねばならぬ。内に秘められたものが四圍の環境で飛出して來る。共觀福音書及びパウロの三つの手紙に、敎會は神の國と同じ意で用ひられて居る。吾々の身體の有機的關係が神の國の象徵にされて居る。コリント前書十二章。ローマ書十二ノ四、五。コリント前書十ノ十六、十七。及十二ノ十二—廿。エペソ書二ノ十四—十六。三ノ三六。四ノ四—十六。五ノ卅—卅二。などには身體のことを書いてある。キリストが天國に就いて敎へられた時、ヨハネ傳十五章にある如く樹と枝の關係で說き給ふた。神秘的經驗をユニックとするはよいが普遍的とせんとする事は誤である。机の面と脚とは

有機的關係でなく、集合的關係であるがキリストの天國觀は有機的關係である。集合的關係になり易いが、それは誤である。國家の改良の如きも集合的でなく有機的關係である故に、あだかも頭が大きくていやでもちよん切るわけに行かぬ、手然り、足然り。單一な有機的の關係である。身體は最もよく天國を現して居るものである。

神の國は心靈の新しい秩序で、單純な主觀でなく客觀、集合的關係でなく有機的關係、自己中心主義でなく、新時代の倫理的要求を充たすものである。

（未完）

（講演梗概筆記文責有記者）

# プレシコフスカヤ（抄譯）（七）

森田松榮

要塞に禁錮中の彼女は、健康以外には、一身上の事柄に就て書くことを嚴禁された。政治を論ずることも、政府のことをいふ事も、近刊書に就て話すことも禁ぜられた。

彼女が書いた數多い手紙の中で、その息子に宛てた幾通から、ほんの少しづゝを左に拔萃する。（息子は、幼時親戚の手に渡されてから、ずつと貴族的に養育されたので、母の思想に對しては、理解も共鳴もなかつた。彼は小說家であつた）。

一九〇九年一月二十二日附手紙の一節。

「愛するN。あなたに會つて私はほんたうに嬉しかつた。來て下さつてありがたう。あなたが、いつも、あんなに丈夫さうだといゝのですがね。私は、人が單一な目的を有つ時は、精神と肉體との一致契

合の必要を感じます。そして私は、人の一生が、たつた一度の危機によつてすら、どれほど烈しく恐ろしい破綻を受けるかをよく知つてゐます。それは、人の一生を丸つきり變へて了ふことが出來るのですですから、一切の卑劣な不健全な事をお避けなさい。することはすべて、純粋な動機からばかりなさい。善い動機は人間を美にし、顔に美しい表情を生じます。わが愛子よ、あなたを完成させるあらゆることに、あなたが成功することを私は祈ります。

「私はあなたの部屋に一緒にゐて、あなたの見た事聞いた事、爲たいと思ふ事などを、あなたが話してくれるのをきいてゐる自分を想像して見ます。初めの中は根氣よくあなたに聽き入つてゐます。が、やがて、私は議論し始めます。私の魂に有害ななんでも、殊に卑劣な人間達がお互に爲あふいやなことはたとへ、それが、取り返しのつかない結果を生じないにしても、その描寫を讀んだり聞いたりすることが、とても私には出來ないことを、あなたは御存じですか？

私は初めてヂッケンスを讀んでゐますが、ペーヂをとばさずにはゐられません。讀みながら「あゝこれは千年も前に起つたことだ、今はこんな事は丸つきりないのだ」と獨り言しながらも、矢張り、いとはしい事の描寫は、讀めないのです。あなたがお書きなさる本の中でも、幾頁かとばさなければなるまいかと心配しますが、止むを得ません。私はいやな點を讀まずに、筋を知るやうにしませう。私を大變嬉しがらせたのは、何だか御存じですか？「アイヴハンホー」です。……それでも私は土地の掠奪を書いてある四章ばかりとばしました。………」

一九〇九年三月二日附

「……ゼネバの湖に就て、あなたの云つた事——あの美が多くの陳腐な繪のために損じられてゐる——を私はよく憶出します。でも考へて御覧なさい、愛子よ、自然の中の美しい一切のものが、どれ程さういふ風に「汚されて」ゐるでせう。私達はあんなに

も多くの年代間、あんなにも多くの詩人達にうたはれ、あんなにも多くの畫工達に描かれたからといつて、空や星や海や山を私は責めることをしませうか？　愛さなくなつて了ふでせうか？　ミロ女神の繪が、街といふ街のどの隅にもあるといふ丈で、我女を嘆賞する事は、似つかはしくないと我々は思ひませうか？　否、これは偏見です……もしもそれがほんたうだとしたら、地球上に、優雅な趣のあるものは、何一つ殘つてはゐないでせう――群衆は、すべて此等のものを、すべての方面、すべての場所から。既に眺め盡して了つてゐるのですから、美の意識は我々のうちにあります、そしてそれが健に發達した時――即ち我々が、美のごく微妙を認識し、鑑賞し得る時――には、群衆に嘆美を感じさせる一切のものは、我々には猶一層美しく見えるものなのです。

四月二日附

「愛子よ、もし私を樂しませて下さる心ならば、いろんな國や時代を叙してゐる挿繪入の本を見つけて下さい。私の知らない本ならば、猶結構ですけれど文章がよくて挿繪が澤山あるかぎり、この十年乃至十五年間に出版されたものなら何でもようございます、然し陰謀や殘虐な記事のないものに限ります。

「英國人は今何を習いてゐるでせう？　彼等は公衆に何を與へてゐますか？　あなたの「時事をお知りですか？」」の質問には笑つて了ひました。愛子よ、私は盗まれて來てワタリ鳥や狼さへものぞく事の出來ないやうな所に押籠められてゐるあの傳説の中の人間達そつくりの境遇にゐるのです。四方の壁のほかには何一つ見ず、教會の鐘の音のほかには何一つ聞かないのです。私の過去はあらゆる種類の束縛で籬を圍らされてゐたのですが、これ程の束縛は前に全く經驗しなかつたところです。これが、印象や觀察が私の記憶に既に充分貯へられたこの先年に至つて起つてようございました。私の過去全體が、一級々々と經ていく素振らしい學校のやうに、私の前に

あらはれてゐます。まだどのくらい級が殘つてゐることか神樣だけが御存じです！ 人生は、學ばうと志すべてにとつて一大敎師です。本道に達するものは幸福ですけれど、さもないと人は、何一つ學ばず、何一つ考へずに人生を通り拔けて了ひませう。多數がさうして生き方をしてゐます、それなのにまあ！ 誰一人彼等を助けないのです。然し知るといふことがどんなに面白いか、どんなに幸福であるかを分つてゐる人は他人を敎へる義務があります。まあ、私はお說敎をし出しましたね！

四月二十七日

「……人々の中にある善いものと正しいものとは悉く尊重するやうにお努めなさい。人々から完全を期待なさらないやうに、又誰も彼もを一つ型に篏め込まうとなさらないやうに――それが健全な型であらうとも――彼が眞面目である限りは。人間の心は自らを成長させ形成させつゝあるもので、昔の埃や汚れの殘りを今なほ振ひ落しつゝあるのです。自分達や他の人達の中にあるその汚れを憎む習慣が既に出來てゐる人は祝福された人です。過去の屍衣をぬぎ棄てゝ登らうとしてゐる人を助けることは、一步進んだ解つてゐる人の努です。

「……隣人に對する愛を自分のうちに發達させる人々、人間の價値をあらゆるものにまさつて尊ぶ人々は幸福です……」

＊　＊　＊　＊

二人の老革命主義者の爲に寬大な處置を乞ふ請願書は、有力な人々に署名されて、英國からも米國からも送られた。裁判の結果、チャイコフスキー博士は放免された。ブレシコフスカヤは終身囚としてシベリヤに流刑された。

左はチャイコフスキー博士からバロウ夫人宛の手紙である。

「我々はあなたの老友（譯者曰ブレシコフスカヤなり）に會ひ、堅い握手をし、兩頰に接吻しました。彼女の强壯な身體も、よる年波と境遇とにせかれて衰へ出し

て來ましたが、毅然とした勇氣は、もとと變りません。彼女は新聞通信員の一團や私の妻子を見て喜んで一同に接吻しました。彼女はアリス・ブラックエル孃とあなたとには特によろしく傳へてくれと云ふて「私は彼等――彼等のすべて――を愛してゐると云つて下さい」といひました。判決があつたのと、守衞が彼女を取り圍んだとの間はほんの二三分でした「判決には驚入りました。彼女の立場は殊に絶望で投獄の上激烈な勞役を課すといふ宣告ならば、二年のうちに死ぬだらうと彼女も覺悟してゐます。（彼女は六十八才で、法律は激しい勞働を七十才でやつと禁じてゐます）。

「裁判は二日續きました、二日とも私は彼女と同じ腰掛でした守衞は拔身の劍を以て、二人の左右に立つてゐました。

「私の同志（譯者曰プレシコフスカヤ）は、職業をきかれたとき、靜かに然し凛然と「社會主義の宣傳者」と答へました。裁判中、彼女は幾度か事實に關して注意を與へ、公訴狀の陳述の誤を訂し、證人達の僞の辯護を否認し、もの靜かな威嚴と、崇高な偉大さとを兼備へた態度で、黨の事業にたづさはつてゐたことをいつも是認してゐました。

「あの白髮の頭と、眞直な姿とが、裁判所の廊下へ守衞の群に圍まれて消えていくのを見たときのつらさ！　この事、私が知つてゐる限りでの最も氣高く最も勇敢なこの婦人か、あらゆる人權を剝奪した殘虐の王國に投込まれ、小役人や看守のその時々の氣分次第に取り扱かはれる！　私は彼女が判決を聽いてゐた時ほど輝いた本懷らしげな顏をしたのを見たことはありませんでした。」

プレシコフスカヤは、ペトログラードから數千哩を隔てたレナ河中の小島にあるキレンスクといふ小さな町へ流刑された。

彼女の友人達は、政府の流刑囚列車よりもらくな列車でいく丈の旅費を彼女の爲に支拂はうとしたけれど彼女は斷つた。彼女は特別な特權は欲しなかつ

た。友人達が送つた金も、同囚の人々と分けてもいゝといふ條件がない限り受けることを欲しなかつた。シベリアに輸送される筈の一團の用意が整ふまで彼女は監獄にゐた。それは百五十人の政治囚と百人の普通犯人とから成つてゐた。旅行は春から殆秋までかゝつた。初めペテログラードからイルクーツクまでは汽車でいつた。在監中彼女は二週間壞血病を煩つた。たつた一人丈が彼女に面會して、彼女の爲に據金された金の幾分を許可されたゞけで、そのほかに何一つ、壞血病の爲のレモンすらも手渡しすることは許されなかつた。それから囚人達は一日約廿五哩づゝ二日歩いて、アレクサンドロフスクに着いた。其所から彼女は荷馬車で出發した。行列は八十臺の農業用の荷馬車から成つてゐて、馬車一臺に馭者一人囚人三人宛のせてゐた。彼女は無事に旅をしおほせた。途中で護送車が停つた時、彼女を見た一人の政治囚は、一九一六年九月二十四日附で、左の手紙をかいてゐる。

「おばあさんは八月十四日に此所を通つた時、悲しさうな顔をして、ヨセフのことをたづねました。「あゝ、監獄で行はれてゐること――思ひ出すことも話すこともとても出來ない」といつた彼女の顔は曇りました、一分前まではほんとに活々と輝いてゐたのですが。同志の不幸は、心のひどい疼のやうに彼女に苦痛を與へるのです。私達が彼女に逢つてゐた間、彼女が沈んだのはこの時丈でした。そのほかはずつとそれは〳〵元氣で深切で、彼女がもう七十歳に手が屆いてをり二年半の獨房禁錮から出されたばかりだつたなどとは、信じられないほどでした。薔薇色の顔をしたふつくりした顔立（私は特別に注意したのです――皺がちつともありませんでした）と、輝やいた眼と、頭巾の下から出て額にかゝつてゐた白髮。行列は馬をとりかへる爲に我々の村の外で停まりました。それは全く陣營でした、護送の鎖にかこまれた二百五十の人間の。

「灰色の空の下で、雨の中にゐる灰色の着物のこの

群の中で、彼女の凜々しい姿はすぐに殘らずの人々の注意を牽きました。一九〇五年私が最後に彼女に逢つた時から見ると若くなつたやうでした。至極元氣でした。若い人々の一群が彼女に伴つてゐました。これは彼女を快活にし勇氣づけて、彼女が我々に與へた印象を濃くしました。そしてこれは、バラックだの野營の火を圍んで夜を過しながら、ガタ〳〵搖れる荷馬車で、雨に降り通しに降られつゝ、ひどくつらい旅を五月もした後だつたのです。大概の人ならすつかりまゐつて了つたところでせうが、我々のおばあさんは、學生の會にでも行つて來たやうな顔をしてゐました。

「我々は護送の鎖の中に入ることが出來たので、自分の家族にでも圍まれてゐるとでもいつたやうな彼女に會ふことが出來ました。彼女は一行の中心で、一般の注意を一身に集めてゐました、同志や政治囚ばかりでなく、普通の囚人や護送の兵士達の。

「四月我々が目的地に護送されていく途中、護送吏が幾度も々々「おばあさんは何時やつて來るんですか。どうぞして見たいものだ!」と我々にたづねたのは面白い事實でした。イルクーックの監獄でも亦彼女を待ちうけてゐました。シベリア一帶の在監者と流刑者とは、みんなこの『奇蹟の婦人』を見たがつて待つてゐたのであります。

「生憎行列は此所にはほんの少ししか停まつてゐませんでした。何しろ彼女に會つて敬意を表したいと望む者が多いので、彼女に話すひまは殆ありませんでした。彼女は殆始終戯談をいつてゐました――我々みんなに接吻しました――もう今は大人になつてゐる我々の子供ヴォロヂカを見て大變よろこんで接吻しました。我々が挨拶を交したり、あなたもその中にあつた共通の友人達のことを憶出すひまも、あるかなしのうちに護送吏が來て「どうかおばあさん、あなたの車に乘つて下さい」といつて、彼女を伴つて荷馬車に乘りました。彼女は同車の同志をさして「これは私の友人です。途中ずつと私の世話をして

下さいました」といひました。同じ車の中でも一人は弱々しい婦人でしたが、すつかり疲れ切つてゐて腰掛ける力もない程で、すぐに枯草の上に臥て了ひました。「非國教徒です」とおばあさんは低聲で云つて、「それからこれが私達の愛する親切なスタロスタ」といひながら、一行中の代議員である丈の高い快活な學生を指しました。」

カチャグから舟に乗り、又荷馬車に乗つて、一九一〇年八月二十七日に彼女はキレンスクに達した。八月二十九日プレシコフスカヤは昔の同志ラザレフに次の手紙を書いた。彼は政治犯で瑞西に追放されてゐたのであるが長年の間厚い友愛を以て彼女の安寧に氣を用ひ、又金を贈つたりしてゐた。

「愛する兄弟、一昨日目的地に着きました。私の旅の細かいことは述べないことにして、私の要るものだけを記します、もう冬が近づいてゐますから。

「聖ペテルスブルグの運送取扱をする監獄に、私がおいて來た金も品物もまだ手に入りません。私の出發間際に私にもつてきて見せて下さつたあの美しい暖い毛布を憶出してゐますので、あれに添へて、頭巾代りの暖かい肩掛と、輕い防水布及び暖いフランネルの下袴二枚、暖かい靴下二足、綿布の敷布地幾尺かを頂きたく思ひます、それで身のまわりの要るだけのものがとゝのひます。

「こゝは生活が非常に高いのです。特別に家賃は借家人が夥しい爲に高く、新らしい流刑囚の一行が來る度に騰つていきます。私は丸太造りの家を半分借りました。寢室、臺所、客室の小さな三室に獨立した入口が附いてゐて、薪、水、掃除とも全部で一ケ月五留(約一弗半)です。

「私は小食に馴れて來て、只今ではほんの少しで足りるのですが、粗食はたべられません。私の無氣味な腫れはひいてきました。ひどい腎臟炎らしいのです、入浴をといはれましたから親切な同志の手を借りてどうにか出來やうと思ひます。同志の世話にな

らなかつたならば、旅の途中でよつぽどひどい目にあつたことゝ思ひます。

「さよなら、私は金と本と新らしい音信と大切な品とを待つてゐます。M姉妹と親戚一同とを抱擁します。」（未完）

# 衛生思想を重んぜよ

志立タキ子

祈禱書の中にある、我等はなすべき事をなさず、なすべからざる事をなし云々。の言を日本女子に當嵌めて見ると、誠に私共はせずともよい事に、憂身をやつし、する筈の事をしないでゐると、つくぐ感じます。が扨しようと思つて見ると、或は取掛つて見ると、第一に感ずるのは、體力の足らぬ事であります。

人の體と云ふ物は、研究すればする程、複雜で巧妙であつて、これを神様が企圖し給ふた様に、持つて行くには、深遠な學問がなければ出來ぬと云ふ事は、生理學を少しでも學んだ者は誰でも思ふ事でありましよう。假令専門の學者とならないでも私共は一通りを心得て置いて、法外な不養生をしたり、迷信に陷つたりせぬ様注意しなければなりませぬ。次の一文は福翁百話の中の「生理學の大事」と云ふ題からの抜書きであります。

「人の取扱ふ一切の諸道具にても、其性質と其の働とを知らざれば、誤つて之を損する事多し。況ん

や、自分の身體に於てをや。之を大切にして、損する事なからんと欲せば、先づ自から知らざるべからざるなり。人身の構造、組織を示すは、解剖學にして、其の働を說くものを、生理學と云ひ此身體を健康に保つの法を敎ふるは、健全學なり。(中略)人の心身は唯休息するのみを以て、維持すべからず。常に心を用ひざる者は、愚となり、常に身體を安逸にする者は、虛弱に陷るの約束なれば、運動、奔走以て筋骨を役し、思案、工風以て腦を勞して、生氣を養ふと同時に其勞役の法を變化し、適宜に休息する事も亦甚だ大切なり。其法一晝夜の二十四時間を三分して八時間は眠り、八時間は勞役し、殘る八時間は、飲食、遊戲、自由、自在の休息時間と定むべし。又其勞役の八時間も、精神のみ勞すべからず。筋肉のみ役す可らず。之を折半して、四時間を心勞し、四時間を力役して、適當なれども、人事繁多の世の中に迚も望む可き事に非ざれば、八時間打通しに精神を勞したる人は、其の休息時間に專ら身體運動の快樂を求め、之に反し、力役のみ打通したる人は、休息時間に身體を靜にして心を樂ましむるの工風專一なり、(中略)世間幾多の無學者流か、家計の豐なるにも拘はらず、攝生法の無頓着よりして、病に犯され既に病床に臥しても、醫を選ぶの法を知らず身躬から寒熱、痛痒を覺ゆるのみにして、更に生理、病理の思想なきが故に、假令ひ良醫に逢ふも明に容體を陳ぶるの法を知らず、又醫師の言を聞とも其意を解する事能はず、空々、寂々、夢中に治療を受けて、夢中に苦樂を訴へ、生る所以を知らずして生き、死する所以を知らずして死する者、比々皆是なり。家道繁昌して家人は死す。畢竟學問を重んぜざるの結果と云ふべきのみ」。

右と同じ書物の中に、無學の不幸と云ふ趣で、或る大家の夫人が、病氣に罹つた所が家中に衞生思想のある者がなかつた爲めに、種々な古流の醫師を招き、譯のわからぬ藥を飲み、又は加持、祈禱などに日を費した後、快方に向はぬので、新知識のある醫師

に診察を乞ふたら、最早手後れであつて、病人は斃れた、と云ふ話があります。病人を大切に思ひ、費用を厭はずあらん限りの手を盡しても、効がないのみか、却つて病勢を助ける事さへあつて、最初から適當な治療をしたら、全快なし得た病人も、當人と周圍の者が無學の爲めに、病苦を増し、一命を短縮する事は今日も世間に數々ある例であります。

常には道理の明かな人でも、近親の病氣には、心配の餘り、つひ迷を生じます。增して信頼してゐる醫師から一言むづかしいと云はれると、如何かして回復させたいと思ふ至情から、信仰を脱して、迷信に入る事のあるものであります。朝夕我々の無病である事を謝し、尚、護り給ふ事を神に祈るは、至當の事です。けれども、只祈のみに依つて健康を保ち病までも癒さうとするのは、誤でありませう。今の世に餓死しかけてゐる者の上にマナが降つて助かつた例はありませぬ。けれども其人が神が人を愛し給ふ事を信じ、祈を以て働けば必らず食物を得て餓死から逸れる事は疑ありませぬ。

人間は己の罪から病を釀し、子孫に惡い血統を傳へて、自他を苦るしめてゐるのでありますが、何千年來重ねた罪から、祈のみで直に逸れ得ると私は思ひませぬ。源因があつて生れた結果が、次の源因となり。無智の中に始まり、知識が開けて彌々深みへ入込んだ罪惡、苦痛から逸れるには、人類一同の大々的努力を要すると思ひます。其努力とは、科學の奥義を極め、其命する所に從つて生活する事であると私は信じます。神は氣まぐれに人に苦をお與へになりはしませぬ。斯うすれば此結果がある。それから逸れるには、斯々と示し給ふのであるけれども、人間は智慧の足らないので、種々な感違ひをするのです。例へば三十年四十年前にはコレラ、ペストなどの病が何故、傳染するかわからない爲めに豫防、撲滅に無益の手數をかけて目的を達しませんでした。科學の少しも開けぬ、昔は流行病は、神の怒と思ひましたから、それを鎭めると稱へて、盛んに祈

構をしたものであります。所が、我々の住む地球の上には、黴菌と云ふ肉眼では見えない植物だか、動物だか、一寸解り兼るものゝある事が顕微鏡が發明されてから、知れました。黴菌を研究してゐるうちに其中には人間の爲めになるのもあれば非常な害をするものもあるわからない傳染病はそれ等のものゝ作用であると云ふ事がわかつてから、治療の法も、豫防の法も、一變されました。そうして昔なら到底助からぬ病人の全快したのは澤山あります。今一段科學が進歩して日本人一般に其知識が普及したら、現在よりも遥かに死亡率を引下げ得ると思ひます。

黴菌は昔も今も同じ作用をしてゐるのであつて、人間はそれが繁殖する様な事をして、繁殖させて何千年、何百年の間苦るしんで、やつと譯が解つて撲滅に掛つたのであります。けれども世界中の人間の氣が揃はないから、一方で撲滅に力を盡してゐると、一方では平氣で繁殖させてゐる人があります。殊に撲滅の法も上から見たら未だ幼稚なものでありましようから傳染病は、却々根絶しませぬ。けれども銘々の住んでゐる町だけとか、村だけとか、區域を限るなら、無病にする事は出來る事であります。併し傳染病の外にも病氣は澤山あります。殊に今の日本の様に、日常生活が複雑であると、精神を過勞するので病氣でないのに病氣と思つたり、又は他の壓迫或は生活難の爲めに病氣で休養せねばならぬ所を、こらへて働いて、遂に回復が出來なくなることもあります、人身の構造は不思儀な程巧妙であるから、萬人に當嵌まる攝生の法を委しく云ふ事は出來ませぬ。西洋には四十になつて自分の醫師でない者は、馬鹿だといふ言があります。其の意味は、四十位になれば、經驗から自分の身體の工合を、醫師位に知る筈であると、云ふ事であります。近年醫學が著しい進歩をしたと云ふもの丶未だ人間の體の中には解らない部分があるのですから、此驚くべき創造物を神意に叶ふやうに扱ふには、容易ならぬ研究

と工夫を要します。私共は、これまで學者を通じて與へ給ふた、知識を謝し、尙此上に醫學を專門とする者は、眞面目に研究を續け、專門外の者は、各々靈を汚さぬと同時に、肉體も損せぬやう心掛くべきものと思ひます。

# 太平洋の船中より

堀　順　子

退屈だつた船上の生活もあと二日だけになりました。每朝船室係が「貴女は御幸福せでしたよ夏だつたてこんな穩な航海はめつたにありません」と申ます程實に氣持のよい航海で、船の動搖も最初の一二日の外、あとは家に居ると同樣です。

出帆前の混雜で多少疲れてゐましたから、二日程は出來るだけ休息いたし元氣を回復してからは、每日讀んだり、書たり横になつたりしてゐます。船醉は氣ほども致しません。或方が初め二三度は御飯を食べないでと云はれましたが、乘船した午後は空腹で夕の御飯の合圖が鳴ると食堂にとび行きました。給仕人が献立を示しますが、何が何やら一向に分りません、スープを注文しましたが、其甘味であつたことは出帆前後に口にした事はありません。其晩は其丈にして止しました。こんな事では困ると思ひ、翌朝早速西洋禮法をみて配膳の順序が書いてありましたから其を覺えて置いて晝の食卓につきますを、今度は佛蘭西語で献立がかいてあるには大閉口、し

かし何でもよしとて注文して見るとマカロニーが出て來ました、こんな風にして御飯の時には謎を解くか、鬮でもひく樣な心持で面白う御座いました。牛の舌は前から聞いてましたが、牛の尾の御馳走とは驚きました、毎晩アイスクリームを一番樂みに待つて居ます。

今度の航海には一等の船客が少なく、其中にも西洋人が小數で、未婚の日本婦人は私一人です、日本人が有勢ですから、食事毎にライスカレー御香物が必らず出ます、時折にはおすし、鰻飯、鳥飯、うどんなどが出ます。先週の日曜には牛鍋の御馳走を船長及び日本の男子十名位と私とでいたゞきました。こんなに男子許り多いものですから御友達は出來ません二等の方には新婦人會の市川房枝さんと山田と云ふ女子學院の生徒が居られます、二三度遊びに行き、新婦人の氣焰をきゝました。婦人の經濟的獨立を大に力說してゐられますが私は大層違つた說を持つてゐます。勿論經濟的獨立は大切な要素ではありますが、其獨立を得たゞけで、婦人の位置が高めらるゝものではありますまいし、又彼等の尊敬と、信賴とを絶對に得らるゝものではなからうと存じます。內面的に精神的に物質的にも婦人はたゞ消費ばかりと斷定を下すは誤で、私共女子が創造してるものが多いと思はれます。

市川房枝さんが日本の男子と御茶を召上た事が、不計も私を西洋人間にしらるゝ動機となりました。共は某西洋婦人が、日本の男子と御茶を飲んでゐたのは私だと云ふてゐますと、他の西洋人は其を否定して、私は此邊で見た事がないと云ふので、其中の一人が私に親しくして、話の終りに先日男子と御茶を飲んでゐたのは私かとの御尋ねでした。私は男子も女子も誰も知らないから。時には上甲板を歩く時もありますが、大抵は船室にゐますと申すと、其夫人は我意を得たりと許りの態度にて椅子にかけ、婦人達に此人ではなかつたと申されました。私は此人達が批評した者でなかつた事を感謝します。其と同

時に小さいことながら色々の暗示を與へ大なる教訓を得たと共に未婚の男女はかくも嚴重に監視されてゐるものかと何だか恐ろしくなりました。

此後私を毎晩右の夫人が御誘ひ下さいましてボストン大學教授や其他の人々に紹介して被下、毎晩散歩後、シテングルームで愉快な物語をします、こんな風に無事に旅立ちました事を考へますと、私の心は只感謝の念に滿たされて居ります。

出帆の日思ひがけなく、レオナスコットを見、修養會を代表し又先生方はじめ皆様の代りと伺ひまして、ほんとうに嬉しく涙が出ました。何といふ有り難い尊い御心で御座いませう。私はほんとうに嬉しうございました。皆樣が斯く切に祈つて被下るのでしたなら、私の彼地に於ける三年間は確かに幸福な御祝福豊かなものであるに違ひありません、多くの天使を通じて神樣は私を助け私を導き、私を鼓舞して最も善きものを得させやうとして居らるゝことを確信し、撓ゆまない信仰を持つて、皆樣の御期待に添ひ、若し御旨ならば私共の欲はないもの、私共の見えない大なる御恵を得て歸り度いと思ふて居ります。何卒日夜の御祈りに私を御加へ下さいませ御願致します。

修養會よりの御電報は淋しい時の喜びで御座いました、有りがたるございます、如何でございましたか、詳しい事を何誰か御しらせ下さることを待つて居ります。

東山荘にて　　家　謙　子

早天の祈りに歌に鶯の合せてこゑのひゞく山荘
鶯の鳴く山近きこの家の目覺め嬉しき朝にもあるかな
神の愛をたゞ思ひつゝこの山の山ふところに身をおきにけり
夕陽の空をうつして湖の面しづかにたそがれにけり
何を思ひ何に見入れる心かも日暮の山の雲にむかひて
かにかくに今はやうやく見出でたる光り頼のみて進みてゆかむ

# ペルシャ避難民來館について

横濱　一幹事

七月十三日朝ペルシャ避難民來館、こゝに二週日を送つて、同二十九日春洋丸にて出帆いたしましたのは、前述の通りでございます。彼等はもう落つき處に平安な生活をはじめたと思ひます。私共もさうのぞんでやみません。私共のうちの家族の誰彼が旅立つた後の樣に、物淋しい氣分を感じた結果が時々言葉に、心に繰り返して、彼等に對しての記憶を新にしてます。

彼等の中の或るものは故國ペルシャでは相當の位置ある人々でした。子供三人を併せて十七名。四家族は大地主の家族六名、教師の家族五名、葡萄園主の家族三名、運轉手の家族三名といつた區別でしたが、長月日の苦難を共にしたといふ事から得た互の親しさが人間社會のそれにもまして强い樣でした。

子供等に至つては實に、美しい人の性格、神樣から與へられたそのまゝの人といふものゝ美しさを表はしてました。久しぶりで見たおもちや、貰つた人形、まりなど時には數足りない事も有りましたが、お互に妬ましい樣子も見えませんでした。全く彼等の父母が此の世の失せて行く寶などから超越し其れにもまして、永遠の幸ちを得んとして最高の望みが、年はも行かぬ子供にまで實現されてるのでせう。一人の子供が赤い縮緬の着物を着たお人形を一人が木綿の黒つぽい其れも古びた着物を着たはげ額の人形を受け取つた其の時其の子が兩方を見て心から喜んだ、その幼い然し良い物惡るい物位には見わけのつく八歳になるシユラミの喜びの顔は何物にも憎して美しうございました。きつと此のあはれな人形の形

の奥の見えない物を見たのでせう。凡べてがこの様に行はれてました。私はこゝに此の二人の女の子が後で野村さんの小さいお嬢さんのふみ子さんから、立派な西洋人形を頂て大喜びして夜中だいてた事をもお知らせしたい。聞けば四十幾歳とかいふ大ず主さんを私どもはお爺さんとよんでました、長い間の苦難が彼等を二十も老ひさせたのでせう。彼等も人であるからには失ふ事のつらさも感じたのでせう。時々空箱の裏などに、三年前失つた家を巧みに畫いてました。聞く私どもに說明する處を申すと、財產家で家も農園も牧園もあり多くの召使をさへ有して、幸ち多い生活をして居たとか。凡べてを失つたその人の中に、輝いた品格はそれを證據だてしました、滯濱中二回當市の敎會に經驗話をされました。淚してきゝました。そしてその人々を尊敬する念が增しました。順序を追ふて少しのべて見ませう。三年前の十二月クリスマスに近い冬の寒い夜半十二時に、彼等に對して卽時各自の家から持物から離れよとの命令が出ました。その命令を出したのは、トルコのモハメット敎徒からです、彼等は強い命令を出したのです。彼等はその信ずる處をよしとして、宗敎的主義を基としての大迫害をしたのです。信ずる處の強いだけに、受けたキリスト敎徒にとりては大いなる苦痛が感じられたのです。此の命令を受けた八千萬のキリスト敎徒が一時に家を出だしたので其の困難は一方ならず、爲めに弱い女や、子供はおくれて見る見る內にモハメット敎徒の刄にかゝつたのです。一家族の內に一人か、二人は、人混みを先きへ、先きへと走つて、各々家族のために食糧をさがしました。主人に置きざりにされた山羊の乳を搾つたり、主のない畑から野菜を取つたりして、そうしたいたましい旅行の途中赤坊は死ぬ、老人は死ぬ病氣はおそふ、そして林に野にかくれながら病を癒して來たと申します。三人の子供もこんな苦しい旅を、或る時は七日間も、水さへ飮まずに走り通し死に近かつた事が數度あつたそうです。大人が全く力なく

なつたので止むなく其時三歳ばかりであつたシュラミやアプリン、エリス（其の子供たちの名）を歩ませたのです、彼等にもその記憶が鮮かと見えて其の話の時になると、淋しい笑ひを洩しました。大地主さんの兄さんは軍人でありました。ロンドンで學んで大醫家の博學者で、歸國の後醫を傍らに宣敎師となつて名譽ある位置にあつた人でしたが、此の逃走の列に加つて行く途中饑えて死んだそうです。先生の家族の一人に、先生の母なる六十歳の老女が居ました。來館後毎日物淋しい述懷らしい樣子に、聞けば只一人の弟が途中さし殺されたのを目前に見たといふその慘たる經驗の結果だと孫娘は私共に語りました。いたましい長途の旅行を今記すに限りがありません。英國兵の居る區域にやう〳〵のびて後も幾多の有無形の試練を經てアメリカへのその途中日本へ上陸したのです。橫濱女子青年會の二階廣間に、四家族は、四隅を陣取つて樂しい平安な二週日を三年越し始めて送つたと申します。二週日彼等を宿して食事萬端の世話をした私どもは彼等と同じ喜びが味へました。會館に向ひあはせた、上州屋旅館は彼等來館の翌朝早々に大箱に一ぱいのパンを送られました。その時の私どもの感謝。それに引き續いて市の親切な方々の同情、當會の會員の親切、ルイズ、クラブ會員の心よりのもてなしに彼等は「日本を決して忘れない」と幾度か強く繰り返してました。殊に橫澤幹事の終りまで勵む御心、美しい同情の働きは最後の日迄、然もむづかしい事々を負つて、乘船のための金の工面まで夜おそくまで委員の方々と計られたと思ひます。近所の東夫さへ、青年會はえらい、こう話してるのを聞きました。本部は此の擧をめで〻八百圓を旅費として借與されました。日本基督敎女子青年會のほこりと致しませう。

終りに私どもは彼等の言葉の一つを繰りかへしたいのです「私どもは地上の家を失つた、又これから各々目的地に家を建てやうと志し、今日その途中日本に居る然しやがて我等は主のそなへ玉ふ處に行か

ねばならぬ。その處には主が我等に與へんと約束し玉ふた家がある。その家は失はれない。その家を得るためにもつと忠實でありたい。」失つた物、惨ましい經驗は少しも悔ひない、此の永遠の喜びを得るためには、彼等はやつれた中に何時も感謝を續けてました。

# 箱根の幹事會について（外一篇）

岡崎小文

九月の八日から四日間相州箱根で、日本基督教女子青年會の幹事會が催されました。神戸、大阪、京都、横濱、東京及本部より合計四十八名出席しました。日本人幹事二十四名、西洋人幹事二十四名其內七人は今度新に米國よりお迎へした方々で五名はまだ幹事の卵子で、日語學校で學ばれる方々です。

新幹事の中にB、I、J（日本で生れたとの意）のジン、チヤペルを迎へました事は大な喜でした。ジンさんは私がまだ青山の五年生の時は可愛らしい子供で私どもの體操をよく見にゐらしたものです。其姉様のコンスタンスさんは東京女子大學にメリーさんは青山女學院に教鞭をおとりになつて居ます。お父様のチヤペル氏は長い間日本の傳道界にお盡し下して居ます。一家族揃つていろ／＼の方面に於いて、日本の爲にお働き下さることを嬉しく思ひます。

三日間の會議には、中々議論の花が咲き、即座には決し兼ねる問題が大部分でありました爲め、それ

〳〵の委員を選んで委員附托になり、來年の幹事會迄によく研究と實地調査とをするやうに決定しました。種々の問題の中で一番力を入れましたのは、女子青年會の目的を明に理解すると言ふ點でした。若し此の目的が各自の胸に明に理解されるならば、自らの性格の上にも、人との交の上にも活働の上にも常に、目標に向つて正しい進路を取つて行かれるからです。それで得ました答の內重なるものを擧げますと、

キリストを紹介すること。

奉仕する者の出來るやうに女子を導くこと。

牧師の、教會の不足を補ひ、若い人に適合した道を教へること。

遊ぶ時、勉强する時、吾々を通じて神を知らせること。

團體的精神を養ふこと。

體智靈德育をほどこすこと。

女子青年會は善事に用ひ得る原動力を發養することの出來る畑（場所）である。然して、社會に於て働ける人を作り、國家の强い力となり、一つの强い社會勢力となり社會の改革の先導者とならねばならぬこと。

以上の答を一つにまとめますれば、姉妹團體として强い社會勢力となり、神の國を建設する、これが眞の目的であると言ふ事に決着しました。

我々は我々の體驗以上に人を引上る力はありません、かく思ふ時幹事は激勵され目標に向つて進まふとの望に燃やされました。

九日の夜は七時過から一時間餘三十餘名の幹事、船四隻に分乘し、芦の湖上に遊びました。隣の船に投げかける歌、返り歌、輕いユーモアーのあるもの英語の歌に、日本語の歌に、盛の騷ぎ、黑い水面、舳先の白波、冷い風、やがて新月が波に碎けますとさすがの歌聲も止んで、靜寂の雄辯の中にしばし、己々の靈は躍りました。

十日の夜は、新幹事歡迎會を催し、「雜誌」と言ふ

題で實に奇拔な餘興をしました。私ども本部の者は表紙と裏表紙とをいたしました。近所の小供が澤山窓から覗見をして居ました。靜に祈る我々は又大に騷ぐ我々です。長い會議に勞れますと三分か五分の間凡てを忘れて體操をします。數日の會合にも、青年會の精神が遺憾なく發揮されました。

十一日、日曜日は青山學院の川尻正修先生をお迎へし聖餐式を守り其後で「內的實驗と外的奉仕」と言ふ題で禮拜說敎を日本語と英語とでされました。實によいお話でした。

山の上でインスパイヤーされた私どもは、私どもの力を要してゐる世界に、新な希望と熱とを以て、働く爲に十二日午前心地よい雨降る山路を、元氣よく下つて參りました。

## マリヤの繪に賦す

愛嬌は可愛い
諂でなく天眞であるならば
柔い温い心地より感を與へる。
人が人に對する時愛嬌がこぼれる
人が自然に接する時愛嬌がかすかに殘る
人が神に向ふ時
愛嬌は去つて神聖な嚴肅さが現れる。

星暗の空を仰ぐマリヤの顏
豊な美しい面はせに
嚴肅さの充てる其顏に見入る時
天を仰ぐ雙の瞳を見つむれば
貴さに心しまりて淚ぐむ。

見つむる者の心に浸込む端正
憧れの火がうつり來る
生ける乙女が此マリヤになるならば
兄弟も夫も子も祝福を受けるだらふ
生ける幾多のマリヤよ出で來ずや。

# 誌友の欄

投稿歡迎　締切毎月十五日

○

横濱　木村雪子

私は修養會がなつかしくてなりません、あの聖い生活をもう一度して見たくてなりません、あの修養會で非常に偉大なしかも數多きものを得ましたこのやうなよい賜物を戴いた私はほんとに責任が重いと思ひます。そして多くのお友達にわけてあげたいとたのしみにいたして居ります、先生修養會場の寄附金等私達は出來るだけ一生懸命に致します、そして少しでも先生方の御苦勞をお助け致したいと存じます、來年はどうしても私達ＹＷＣＡの修養會場で修養會を致さなければなりませんもの、先生なるべく御殿場のやうに山があり水池でもようござりますが)があつて靜かな大自然に包まれた所がよくはございませんでせうか、それから家又は寄宿舎は西洋館の方がよいと思ひます、私は學校がはじまりましたなら皆樣によく申上げて一生懸命に修養會場の事に努力致すつもりです、それから學校に何かクラブを設けたいと思ひますまだ/\澤山望みがございますが又この次に致し

ませう。

○

東京　釜谷綾子

今年の修養會は昨年よりも一昨年よりももつと/\意味の深い修養會であつたやうに思はれます、私の生涯に何をもたらしてくれたか知りませんが若し與へられてゐるこの手足が神の御榮を現はすものであつたならば之はほんとに感謝すべきことゝ存じます、自分は如何にして自分を生かしてゆくべきか、如何にして意義ある生かし方が出來るか、深く考へさせられます、私には祈ること、それのみが大きい力なのでございます、秋の日の或る一日を選んで御殿場の土をふみあの忘れられない一週間の生活を忍ぶべく東山莊にたゞずみ靜かに祈りの時を得たいと思つて居ります、北海道の涯から九州にいたるまで全國に散じられたキャンプガールスの天に向つて叫ぶ其歎の聲を彼處に於てのみ聞くことが出來るのかも知れないと思つて居ります。

○

甲府　深澤佐保美

東の方から星をば知るべに、其昔から豫言された、メシヤなる、キリストを慕ふて貴い寶を捧げんと、たどりついた、三人の博士の如く慕ひ來つた姉妹方は……云々とか、大自然の美しい地を背景として開かれた第十六回夏期修養會に於て沈默の雄辯を與へられて非常に嬉しい、或は創造時代のアダム、イブの原始時代に歸つた氣分がするの、やれ心に惱み抱ける疑ひは晴れて、碧空の如くなつたとか、或はまだ一度も基督教に接近しなかつたが、幸ひ最近になつて、修養會のあることを知り、興味をもつて、慕ひ出席した甲斐あつて、基督教の如何なるものか、又多くの姉妹達が、基督を中心として生活してゐる有樣を目に見る如く見せられた早く郷里に歸り隣人友人に頒けて上げたいとの願ひを持つたとか、種々の感激を與へられし姉妹方を見るにつけ、聞くにつけ、自分一人は喜ばしい信仰の萠芽は發生しなかつた。何等の響きもなかつた、むしろ苦痛のうちに、悶々の中に修養會は終つた、生來驕慢不遜な私は、事々を一々否定し批判して受け納れず、溢れ出づる愛の泉をば

挹み、根本よりの謙遜さ、救はれんとする意志はなかつた、境遇のせいもあらうが、どうしやう／＼と、まるで浮草のやうな心の狀態であつた、然し神は、かやうに罪深き者をも捨て給はず、中心を定め、根本よりの確き信念を與へ給ふた、人生に於ける危機の場合、或は仕事を完全にせんとの願ひを持ち、或は化學的の力を用ひ何物かを發見せんとする場合等如何に努力すれど思ひ通りに成功せず、考へに考へた結果遂に失望した、其最後の一刹那突然光明に輝らされた如く、善き考へ、智慧が浮び、又救ひの手がひろげられるのである、私がこの類によつたのであると思ひます、幾年も々々も經驗を持ちながら、何のつかみどころもなく、淺瀬に居りましたゝめに淺薄な泳ぎ方しか知らなかつたのです、けれど今度こそあの最後の日の一瞬間、神の意志を通してのお言葉はひし／＼胸にあたつて、喰ひ入るのでした、そして幾度も聞いた沖に出でよの一句は適切に感じさせられ、今迄容易に動かされなかつた心は次第次第に傾き、動き、遂にどうしてもめさめよ、我心醒よ勵めよ、力の限り勇め進めと、感じました、そして早く眞の神に歸り、キリストの馥郁たる愛の香に甦り、己れの小さき罪をも赦し下された其神の知遇に、恩惠に酬ひ奉らねばならないと思ひました、それには先づ未信者なる我家庭よりはじめ、隣人、さては迷へる小羊を救ひの御手に歸さなければやまない決心で、眞のクリスチャンの道に突進し、キリストの御跡を慕ふて神の正道を歩みたいものと深く々々思はせられました、之が私の感激の發表でございます。

○

北海道　入間川松代

先生しばらく御無沙汰致しました、私共はもう單衣に羽織を着て居ります先生の方はまだお暑いでせうね、私は先生とおわかれ致しましてからは無事に家に參りました、すぐにお手紙差し上げやうと思つて居りましたが色々お友達から會のことなど聞かれお話して居りまし　暇がなく學校に參りましても先生方やお姉様方に聞かれ私も少し困つてしまひました、けれども皆様は行くとよかつたそんなお話があつたのかと感心して居られました、眞實によいお話を澤山伺つたことを神樣に感謝致して居ります、先生それから修養會に村落傳道について語られたヴオリスまき子樣のミスターヴオリスが昨日學校にいらつしやいましてまき子樣と同じ話をして下さいました、ほんとになつかしく感じました、先生が八幡と仰せられた時あゝと思ひましたするとたしかにさうでしたほんとになつかしくまき子樣のお顏が目に見えるやうです、其お方は函館の教會を立てるのに其設計をなさるためにわざ／＼いらしたさうです。午前は教會に於て御說教なされ午後はお疲れにもかゝはらず學校において下されたのでした、私の親しいお友達にキリスト教について反對された家庭をもつていらした方がありました、私は一生懸命になつて其方が佛教に入らず今迄學校において教へられた神樣のことをほんとうによく考へなさるやうに手紙を書きましたら其友達が以前とはまるで變りお家からどれほど反對されても信仰に進んでゆくとお返事を頂きこんな嬉しいことはございませんでした。

來年に學校の四十年記念ですからどうぞおいで下さいませお待ちして居りますから、今年はミスヘプトンの四十年記念でした、來年はどこに修養會がある事でせうきつと澤山のお友達をおつれして參ります今から其お話をしてはよろこび樂しんで居ります。

# 東京基督教女子青年會報告

希望と元氣に、皆樣の身も靈も滿々ていらつしやることゝ存じます。當會館も永い眠りからさめたやうに去九月十三日。職員一同秋の仕事にとりかゝる前靜かに考へ祈つて聖力を願はんと祈禱會を以てはじめ秋の準備にとりかゝりました。

九月十五日。例年の通り午後二時半より始業式擧行最近英國より其學終へて歸朝せられた志立やな子姉より一同に有益なる御話あり終つていよ〳〵新學期の授業を開始いたしました。

**當會館改築の件。**去七月二十八日より先づ體操場より此仕事に着手いたしあの暑い盛り神田の會館では金鎚やカンナノコギリの音が毎日絶えませんでした多い時には二十五人の職人が一生懸命に働きました程でしたがそれでも仕事が増へたり、延びたりして只今のところ豫定は十月頃落成との事であります。

**改築の塲所**

一、**體操塲**　元の體操室のとなり二室が貫かれ、一方正面に觀覽席が出來上も下も大變廣くなりました

一、**玄關**　新に玄關に事務所が出來ましたから御來館の方々を御まごつきないやうよろこんでお迎へする事も出來、今迄より一層皆樣御便利のことゝ思ひます。

一、クラブサパーの室　クラブの夕飯をいたゞく時の室がどうかしてほしいとは永い間の私共の願で御座いましたが其室も出來ました。

一、祈禱室　改築されたのではありませんが、四階に一つ靜かな何んだか祈りたい氣分のする室が御座います。きれいにして祈禱室と定めました。ほんとうに祈りたい時人をさけて靜かに考へたい方々の爲に此室が待つて居ります。

元の會館とは大分樣子がちがひ便利にもなりましたし、氣持のよい室々になりましたから何卒皆樣いらつしやつて下さいませ。

一人でも多くの方々に御便利のよい樣にまた心のやすめ塲としたい爲に、何處も何處も手を加へて考へましたしたがつて其費用も大したもので御座いますので、來る十一月九日より十五日迄、私共職員は勿論幹部の委員方をはじめ皆樣に、この募金の爲に一週間を捧げていたゞきたう存じまして、切に此紙上に御願ひ申上げました次第で御座います。

## 橫濱基督教女子青年會報告

一ヶ月間ヒッソリとしてゐた本會々館も十三日から新らしき希望の中に再び活氣づいて參りました。も新學期と共に私共の喜ぶべき事は、此度西茂子姉を本會教育部幹事として迎へた事であります。西姉は三年間ニユーヨーク市のドクター、ホワイトの聖書學校に學ばれ後長年山口縣下に傳道されし經驗深い方で本會が同姉を得し事は大いに感謝して居る所であります。二十一日午後四時から教育部始業式を兼ね同姉の歡迎會を會員一同の爲開きます。

○宗教部。聖書の組は教育部の級々の開始と共に開かれ日曜日禮拜は十日より始め、第二日曜日は御殿場修養會出席代表者の集の豫定であります。

○クラブ。夫人クラブは十四日午後一時より例會を開き帆足理一郎氏の「家庭の改造」につき有益なる話がありました。出席者三十一名。

ルキズクラブは二十四日午後本會支那女學生クラブ會員を招待し親睦會を開き、ミス、フエリスのお話を伺ふ事に成つて居ます。

○外人寄宿舍。九月十五日を以て開會滿一年の記念日を迎へました。此一ヶ年間同會に宿泊せられし人百三十五名にして十四ヶ國を代表して居ます。

## 大阪女子青年會報告

○教育部。九月十六日より新學期開始。生徒總數百七十餘。組は英語、西洋料理、音樂、社會學等にて就中最も特色あるは社會學と音樂となり。社會學には醫哲博士島村育人氏を神戸より聘して一週一度の講話を願ひ、音樂はミスアレン及宮城女學校出身の渡邊姉擔當せらる。近く大阪在住のミススタインメッツとて聲樂教授に特殊の才能を有さるゝ專門家を依賴し大いに發展を計る希望なり。

○水曜講話。毎週水曜日の夜主として有職婦人の爲講話會を開く、目的は常識と趣味との涵養の爲めなり。來る二十一日には錦蘭會女學校の河野治子女史に「お彼岸」につきての講話を、二十八日には辯護士松村敏夫氏に婦人に關する法律につきて、十月五日には女醫有田明子氏に衞生講話を願ふ豫定なり。

○聖歌練習。毎日曜日午後三時よりミススタインメッツ指導の下に有志者。聖歌練習あり。

○月報發行。委員吉田わさ子氏によりて編輯せられ會員、間に會の消息を報ずる好機會たる實を擧げつゝあり。山本つち子氏も毎月其妙筆を以て此企を援助せらる。

# 中央學生救濟御寄附金（第四回報告）

金參圓也　磐城高等女學校　（福島）
金五圓也　ゲーンス　（廣島）
金貳拾貳圓四拾錢也　宮城女學校　（仙臺）
金四拾壹圓也　神戸女學院　（神戸）
金參拾圓也　横濱英和女學校　（横濱）
金貳拾圓也　東京青年會、家庭部、ハーヴェストクラブ安藤坂寄宿舍
金五圓也　山室ひな子　（東京）
金九拾五錢也　静岡高等女學校　（静岡）
金拾圓也　札幌高等女學校　（北海道）
金五拾圓也　上田キリスト教青年會　（信州）
金四圓也　シャープレス日曜學校　（水戸）
金五拾四圓參拾六錢也　夕陽丘高等女學校　（大阪）
金參圓也　上野秀子　（山形）
金拾八圓七拾八錢也　豐橋高等女學校　（豐橋）
金壹百四拾四圓六拾錢也　日本女子大學校　（東京）
金八拾壹圓也　女子學院　（東京）
金拾七圓七拾六錢也　三島高等女學校　（大阪）
金參圓也　都濃高等女學校　（山口）
金參拾圓也　德島女子青年會　（德島）
金拾圓也　安積高等女學校　（福島）
金拾五圓也　共愛女學校　（前橋）
金參拾圓也　捜眞女學校　（横濱）
金參拾六圓五拾錢也　香蘭女學校　（東京）
金四拾貳圓四拾四錢也　神戸青年會　（神戸）
金四拾五圓六拾五錢也　修養會獻金
金九拾圓七拾壹錢也　大阪女子青年會　（大阪）
金拾五圓也　岡山高等女學校　（岡山）
金貳拾七圓七拾七錢也　松山高等女學校　（愛媛）
金八圓五拾錢也　三重實業女學校　（三重）
金八圓貳拾八錢也　浦和女學校　（埼玉）
金參拾五圓也　豐橋裁縫女學校　（豐橋）
金拾圓也　東京女子大學校　（東京）
金五圓也　宮崎市女學生ホーム内キリスト教女子青年會
金貳拾六圓也　小樽高等女學校　（北海道）
金拾壹圓八拾錢也　菊池高等女學校　（熊本）
金壹千百拾八圓四拾壹錢也　樂藝會より

計金貳千七拾九圓九拾壹錢也
累計金參千貳百九拾五圓四拾七錢也
（大正十年九月十九日迄の分以下次號）

▽第二回中歐寄附金を募集中十一月十五日締切有志の方はふるつて彼の氣の毒な學生達をお助け下さい。

## 本部負擔金

金九圓也　東洋英和女學校青年會
金壹百圓也　東京女子青年會
金九圓也　廣島女學校青年會
金拾圓也　横濱女子青年會
金拾五圓也　金城女學校青年會
金拾圓也　札幌女子青年會

## 御寄附金（維持費として）

金拾圓也　ジエン、スコット
金貳拾圓也　ゲインス
金拾圓也　松岡錦枝
金拾貳圓也　今西いと
金壹圓也　河田巨
金拾圓也　遺愛女學校青年會

金貳拾圓也　田中なか、(本部建物の爲)

金六圓也　永島博

金參圓也　早川喜美代

金壹圓也　三輪田良子

金五圓也　山田キヨノ

## 修養會の爲

金五拾圓也　捜眞女學校青年會(修養會建物の爲)

金五圓也　ゲインス

金參圓也　阪本花代

## 幹事養成所の爲

金六圓也　大平耕成

(以上大正十年七月より大正十年九月十九日迄の分)

## 本部維持資金申込者

### 維持資金一口拾貳圓

一、一口　今西いと

一、五口　松岡鎭枝

一、一口　河田貞

一、二口　石本靜枝

一、一口　淺井治

一、一口　永島博

一、廿五圓づゝ　河井道子

一、一口　渡邊安子

一、一口　村澤德子

一、一口　松本とよ子

一、一口　釜谷綾子

一、一口　三輪田良子

一、一口　武藤八重

一、一口　細谷春路

一、一口　服部愛子

## 個人消息

□ミス、クラテイー、米國女子青年會總幹事及ミス、カーレー、米國マウント、ホリヨーク大學校長は、八月横濱に上陸後數日本部幹事宅に滯在され支那に向はれしも十月下旬再日本に渡り三週間にかかり視察さるゝ筈なり。兩氏の爲小石川幹事宅に於て婦人教育者を招き午餐を共にしたり。

□フォスデック夫人。同氏を正客として數名の婦人を小石川宅に招待し幹事は船まで見送りたり。

□櫛田孝子氏。ミスバードサルを補佐し本部に就職さるゝことゝなりたり。

□西茂子氏。長く山口縣にて傳道に從事されし同氏は九月より横濱女子青年會教育部を擔任せらる。

□淺井治子氏。九月よりいよ／＼大阪に總幹事として赴任さる。

□ミス、マクレーガー。神戸女子青年會幹事として九月より赴任さる。

□ミス、チャペル。同じく九月より神戸女子青年會に赴任さる猶同氏は青山の有名なる宣教師チャペル氏の御令嬢なり。

□花岡雪子氏。以前靜岡英和女學校の教師たりし同氏は番匠鐵雄氏と富士見町教會にて結婚せられたり。

□細谷森路氏、横濱市社會課に奉職されたりし氏は九月より本部にて執務せらるゝ事になりたり。

□河井道子氏。十月早々信州上田に出張、金澤に立寄り神戸の日本基督教大會に出席の豫定。

□ミスクローマー。本部の書記事務として此秋より赴任さる。

□ミセス、ウッド。十月早々關西方面に工業事業研究の爲二三ヶ月を費す豫定。

□田川大吉郎氏と小松武治氏とは太平洋會議に御出席の由。

□賀川豊彦氏。上京中、神戸勞働爭議の講演及基督教講義を處々にてされつゝあり。

□金森通倫氏。同氏の爲富士見町教會にて二十三日歡迎會催さるよし。

□鈴木文治氏。同氏は三田唯一館にて勞働學校を九月十六日より。開始されたり。

□堀順子氏。同氏への御音信は左記へ

C/o Dean Jordan
University Michigan Ann Arbor
Mich. U, S. A.

## 編輯室より

大竹しづ子氏　牛込區南五軒町四二
紅松文子氏　上海黄陸路一八五ノの
犬伏マキ子氏　横濱市末吉町一ノ十二
森みつ枝氏　三重縣度會郡瀧原村

以上四人の方々の轉居先不明御存じの方は御報下さいませ。

□誌友の皆様住所御變りの時は直に御一報下さい。

□美しい澄んだ中、秋の月、虫の音のすゝり泣きに、私どもの心は深い憧の中に高く引き上られるのをおぼえます。皆様も物を思はする秋にいろ／＼の御經驗を遊、して居らるゝ事でせう。惱みに、苦痛に、喜びに感謝にそれ等の御體驗を御寄稿下さいませ勵まし合ひませう。

□先日英國のオーエンと申方から日本の婦人で英文學、音樂、繪の特別の研究をしたい人の爲に左の名の學校のあることを紹介してくれと申して來ました。

The chantry. Mere. Wiltshire

（こふみ）


### 摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度、前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七弍參番

〔女子青年界〕定價及廣告料

| 定價郵稅共 | 内地 | 海外 |
| --- | --- | --- |
| 一部 | 金十五錢 | 金拾七錢 |
| 一年前金 | 壹圓五十錢 | 金壹圓八拾錢 |

| 廣告料 | 一回掲載 |
| --- | --- |
| 一行 | 金五拾錢 |
| 四分一頁 | 金五圓 |
| 半頁 | 九圓 |
| 全頁 | 金拾五圓 |
| 年極又は回數により割引有 | |

大正十年八月廿八日印刷納本
大正十年九月一日發行

發行所　神田區錦町一丁目十六番地　日本基督教女子青年會　電話 神田三六五二番　振替東京二三七二三番

發行兼編輯人　神田區錦町一丁目十六番地　河井道子

印刷人　芝區三田和泉町七番地　前川吉次郎

印刷所　右同所　三成舍

dining room and kitchen and making a few other changes. A gallery for spectators, seating about sixty people, has also been added. An office has been put in the entrance hall, so that guests will be welcomed immediately upon entering. This, it is hoped, will add to the friendly atmosphere of the building. The rooms on the first floor, formerly occupied by the caretaker, have been turned into a club dining room and kitchen, and another club room has been made on the fourth floor, which will be decorated and furnished by the club girls themselves.

The Tokyo Board met for the first time this Fall on September 16th, and the most important business was the decision to conduct a finance campaign in early November. The amount to be raised will include both the annual budget and the repairs and changes on the building.

Plans are being made to enlarge the commercial branch of the Educational Department by the addition of six new typewriters, making ten in all, and by adding to the teaching force.

## YOKOHAMA ASSOCIATION NEWS

September found all the members of the Secretarial Staff eager to be back at work again. Miss Yokozawa spent a part of her vacation at her home in Sendai, Miss Hibi at her home in Tokyo, Miss Nishi at Karuizawa, Miss Hasegawa at Kamakura, Miss Yasuda at Boshu, and Miss Verry and Miss Allen at Hakone.

The Yokohama Association is greatly rejoiced over the addition of Miss Shige Nishi to the Secretarial Staff. Miss Nishi had three years in America as a student at Dr. White's Bible School, and since that time has been engaged in country evangelistic work near Yamaguchi where she has been associated with Miss Lillian Wells. She will direct the work of the Educational Department.

Miss Yokozawa, the General Secretary, will speak at the opening Vesper Service on October 2nd. On October 9th, the delegates to the Summer Conference at Gotemba will tell of the inspiration which they received there.

The Educational Department Rally was held on Wednesday afternoon, September 21st, following a reception given by the Directors for Miss Nishi.

The Louise Club, which consists of young women of leisure, entertained the members of the Chinese girls Club at a party on September 24th. Miss Ferris, Physical Director of the Tokyo Y.W.C.A., spoke to the girls on the subject " Health," after which she taught them games.

The Residence for Foreign Girls and Women closed its first year's work on September 15th. In this first year 135 women from 14 different countries have been cared for and the work has been self-supporting. Mrs Jordan, the Hostess, has had many opportunities of placing the parlors at the disposal of the Residents for special parties. The Yokohama. Women's Club will make the Residence their meeting place for the next year.

# THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

VOLUME XVIII — OCTOBER, 1921 — NUMBER 10

## NATIONAL

The high point of news from the National Office for this month is the Conference at Hakone when all the secretaries met together for three days to talk over the work for the coming year. Morning and afternoon sessions were held when we discussed our plans and problems with delightful informality. Not only did we compare notes on practical ways of doing our work but we also talked about some of the broad principles which underlie it and tried to interpret our program in the light of those principles. In the late afternoon, wearied from long sessions, we played together and came to know each other in new ways as we walked or swam or rowed in the quiet of the evening and felt the solemn beauty of that most lovely spot sink into our souls. Saturday, just at the close of the afternoon session, the new foreign secretaries arrived and were most heartily welcomed. After supper, we had "stunts" prepared by the various staffs, vying with each other in cleverness and originality. We shouted with laughter and were very gay and festive.

Sunday was a beautiful day, beginning with the Communion Service at nine, immediately followed by preaching. In the afternoon, we met again to talk over some things that we had not been able to finish and in the evening, Miss Kawai gave us, briefly and very simply, our closing thought. All through the Conference was such a feeling of real fellowship and unity, binding us together in one body, dedicated anew to the purpose of bringing life and light to the girls and young women of this great land.

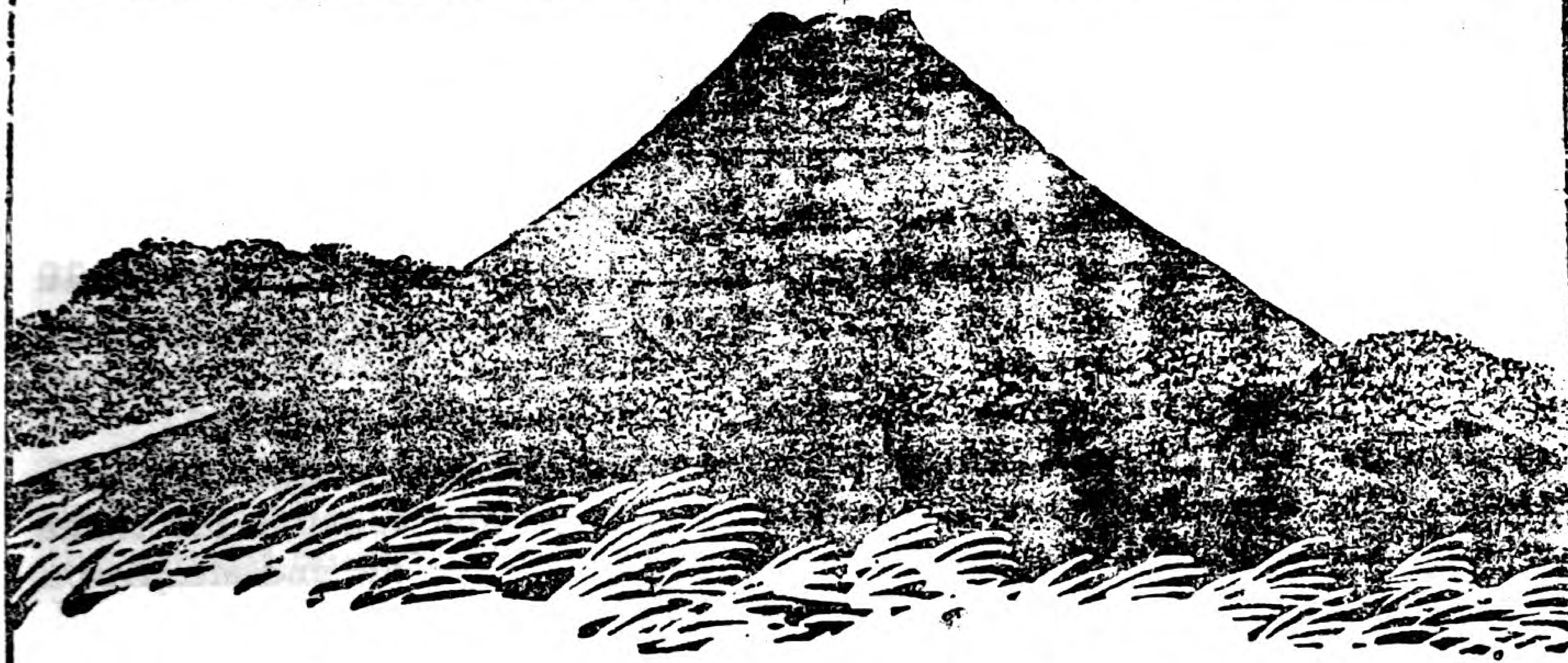
Miss Cratty and Miss Margaret Burton spent a few days in Tokyo on their way to China, and had an opportunity to meet some of the women who are connected with leading educational institutions of Japan. The Associations in Japan are looking forward to Miss Cratty's return the latter part of October.

The national staff has two added members for the beginning of work this fall—Miss Haruji Hosoya and Miss Arial Kromer. They will be in the business office.

## TOKYO

It is only six years since the opening of the Tokyo Association building at 14 Kita Jimbo-cho, Kanda, but, in spite of releasing the dormitory rooms last year for general work, the building is already becoming inadequate for the growing activities. This summer extensive changes and repairs were made which will greatly increase the capacity of the building.

The Gymnasium has been enlarged by tearing out the former dormitory



# 三越の十月

- 寄裂見切反物賣出し（一日より）
- 七五三祝着陳列（同）
- 雜貨新製品陳列會（同）
- 三宅克巳氏滯歐作畫展覽會（二日より）
- 自由畫壇作畫展覽會（十一日より）
- 家具新製品陳列會（同）
- 友禪モスリン陳列（同）
- 婚禮用染模樣陳列（十五日より）
- 子供洋服陳列會（廿一日より）
- 彩壺會主催現代陶器展覽會（廿二日より）
- 御召小紋陳列會（廿三日より）

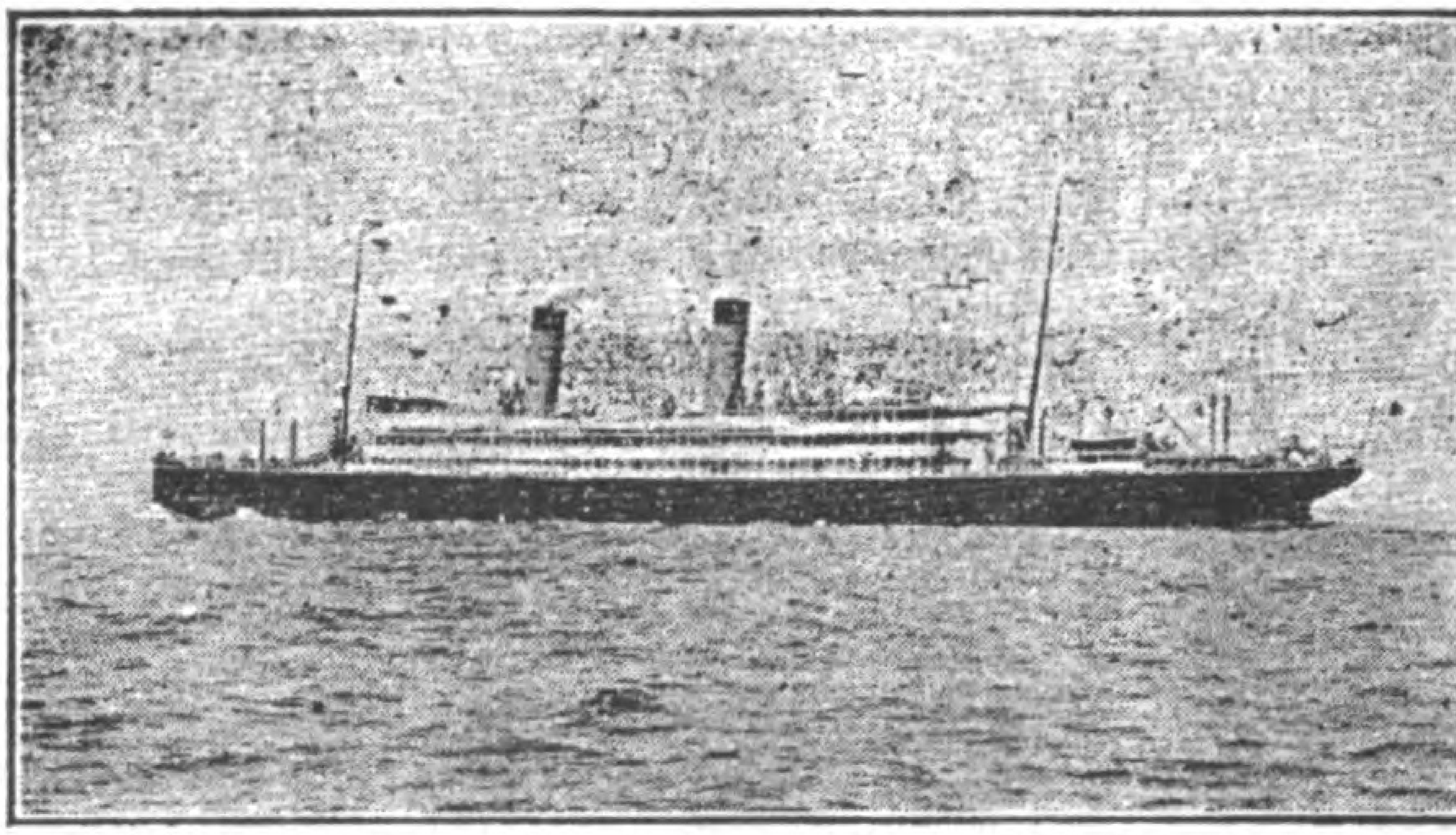
東京市

## 三越呉服店

駿河町

三越の休日　十月十日　十二月二十五日

# 東洋汽船株式會社



**本社** 東京市麴町區永樂町一丁目一番地（電話丸ノ内 一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三番）

**營業所** 横濱市山下町五番（電話本局 四四〇〇、四四〇一、四四〇二、四四〇三、四四〇四番）

**出張所** 神戸市京町八三番。香港、キングス、ビルヂング。上海四川路ノース、チヤイナ、インシユランス、ビルヂング。マニラ、チヤコビルヂング。桑港、マーケツト街六二五、マーチヤンツ、ナシヨナル、バンク、ビルヂング。紐育、ブロードウエイ、一六五。ホノルル、アレキサンダー、ヤング、ビルヂング。

## 北米航路（桑港、布哇ホノルル、、横濱、神戸、長崎、上海、マニラ、及香港間）

本航路は太平洋航路中氣候温和、海上平穩なること第一にして船舶の巨大、設備の完全、待遇の懇切とに由り航海最も安全且つ愉快なり

| | | |
|---|---|---|
| 天洋丸 | 三重螺旋タービン機 | 排水量 二二、〇〇〇噸 |
| 春洋丸 | 同 | 同 二二、〇〇〇噸 |
| コレヤ丸 | 双螺旋機 | 同 二〇、〇〇〇噸 |
| サイベリヤ丸 | 同 | 同 二〇、〇〇〇噸 |
| 波斯丸 | | 同 九、〇〇〇噸 |

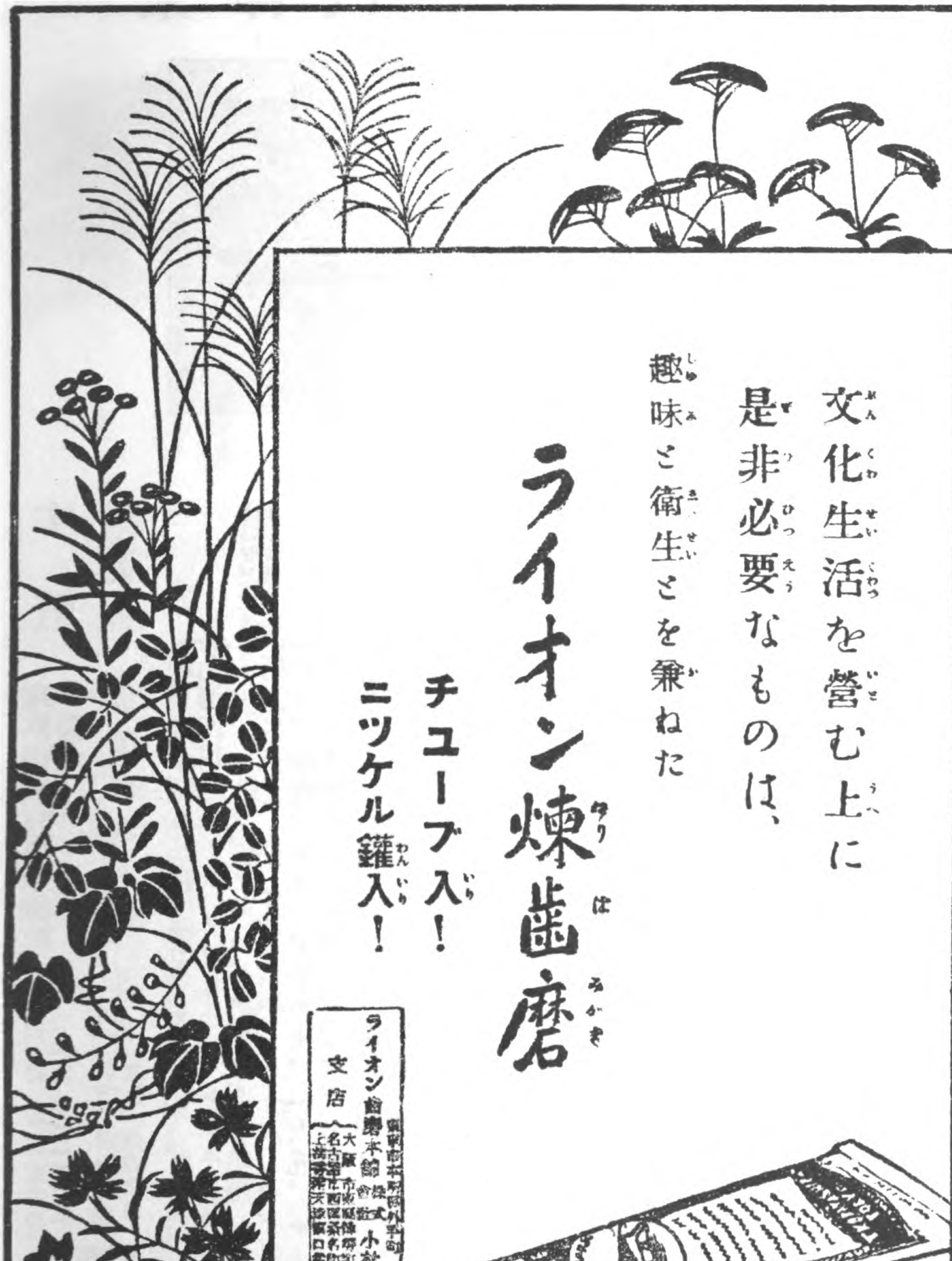
## 南米航路（香港、門司、神戸、横濱、布哇、桑港、羅府、墨國、巴奈馬、秘露及智利諸港間）

本航路は東洋南米間唯一の定期航路なり

| | |
|---|---|
| 安洋丸 | 排水量 一八、七〇〇噸 |
| 紀洋丸 | 同 一七、二〇〇噸 |
| 靜洋丸 | 同 一四、〇〇〇噸 |

各寄港地及各國樞要都市に代理店の設置あれば船室保留並に發着日割等は最寄に就て御問合せを乞ふ

女子青年界第拾八卷第拾號（毎月一回一日發行）
大正十年九月廿六日印刷納本大正十年十月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可




一部定價二十錢